

ひらのぼとうづか
市原市平野馬頭塚

2011

有限会社 丸和建材社
市原市教育委員会

序 文

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。史跡上総国分寺跡や「王賜」銘鉄剣などに代表される国内有数の文化遺産の数々は、これら先人の足跡を今に伝えていきます。

本報告書は、土砂採取に伴い発掘調査がなされた「平野馬頭塚」の成果をまとめたものです。調査事例の少ない供養塚の本調査を実施し、江戸時代の出羽三山信仰における塚の築造を通して、その篤い信仰の一端を垣間見ることができました。

本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導ならびにご協力をいただきました有限会社丸和建材社、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心からお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

市原市教育委員会
教育長 山崎 正夫

例 言

- 1 本書は、千葉縣市原市平野字高野代432-1・3に所在した平野馬頭塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業・報告書編集刊行は、有限会社丸和建材社の計画する土砂採取に伴い、同社の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもと、市原市教育委員会生涯学習部の市原市埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本報告書所収の調査は下記の通りである。
本調査（調査コード セ463） 対象面積：529m²
調査期間：平成22年8月2日～同年10月5日 調査担当：牧野光隆
整理作業
期間：平成22年12月1日～平成22年3月4日 担当：牧野
- 4 本書の編集・執筆は、牧野が担当した。
- 5 図中に示した座標値は日本測地系（平面直角座標第IX系）であり、全体図中の1点に世界測地系変換座標（TKY2JGD ver1.3.79による）を記した。
- 6 調査に際しては、有限会社丸和建材社が事前に等高線図を実測し、その図を改変して第3図に掲載した。

本文目次

第1章 調査の経過と概要	1	第2節 遺構と出土遺物	8
第1節 調査に至る経緯		(1) 塚	8
第2節 調査の概要		(2) 土坑	17
第2章 遺跡の位置と環境	1	(3) その他の時期の出土遺物	18
第1節 地理的環境	1	第4章 総括	19
第2節 歴史的環境	4		
第3章 調査の方法と成果	5		
第1節 調査の方法	5		

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図
第2図 平野馬頭塚周辺地形図
第3図 塚調査前等高線図（S = 1 / 150）
第4図 塚全体図・エレベーション図
第5図 土層断面図（S = 1 / 100）
第6図 出土遺物分布図（塚全体）
第7図 出土遺物分布図（塚中央部）
第8図 出土遺物（1）
第9図 出土遺物（2）
第10図 出土遺物（3）
第11図 SK02 実測図
第12図 出土遺物（4）

図版目次

扉	平野馬頭塚周辺垂直写真（1961年撮影）
図版1	調査前全景
図版2	1層～2層土層断面、遺物出土状況
図版3	1層～3層土層断面
図版4	遺物出土状況 銭・鏡箱
図版5	銭・玉・鏡出土状況、SK02、旧表土面
図版6	出土銭・鏡箱・数珠玉
図版7	出土遺物 石仏・鏡・数珠玉・ 藁等付着銭・縄文土器・石器
図版8	出土銭（1）
図版9	出土銭（2）
図版10	周辺の関連石塔・馬頭観音像

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

平成21年9月、有限会社丸和建材社がこの地で土砂採取の計画を立案し、「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。付近は縄文時代・古墳時代・中世の埋蔵文化財包蔵地である仲の台入会地遺跡（市原市埋蔵文化財分布地図番号26）および平野馬頭塚（同34）として周知されている。付近でふるさと文化課が試掘を実施したところ、縄文時代等の遺構・遺物を確認するには至らなかった。その結果、平野馬頭塚については、工事着手前に本調査を必要とする旨回答をした。協議の結果、同社が埋蔵文化財調査の必要性を理解し協力していただくこととなり、塚本体およびその周囲幅3m部分計529㎡について、記録保存の方向で本調査を実施することになった。

平成22年8月2日より、本調査を開始した。

第2節 調査の概要

塚は、調査前の現状において方形3段築成であることが明確に観察できる状態であり、本来は出羽三山信仰の供養塚（三山塚・行人塚と呼称される場合もある）であったとみられる。塚底辺の長さは19.6m×19.3m前後、高さは約4.0mを計る。塚の頂部や周辺に石碑などは確認できなかった。

この塚を構築する封土の堆積状況を確認した。その結果、いわゆる赤土と呼ぶ関東ローム層を多く含む土で基礎的なマウンドを作り、その上層に黒褐色土をかぶせて成形してあることが観察された。

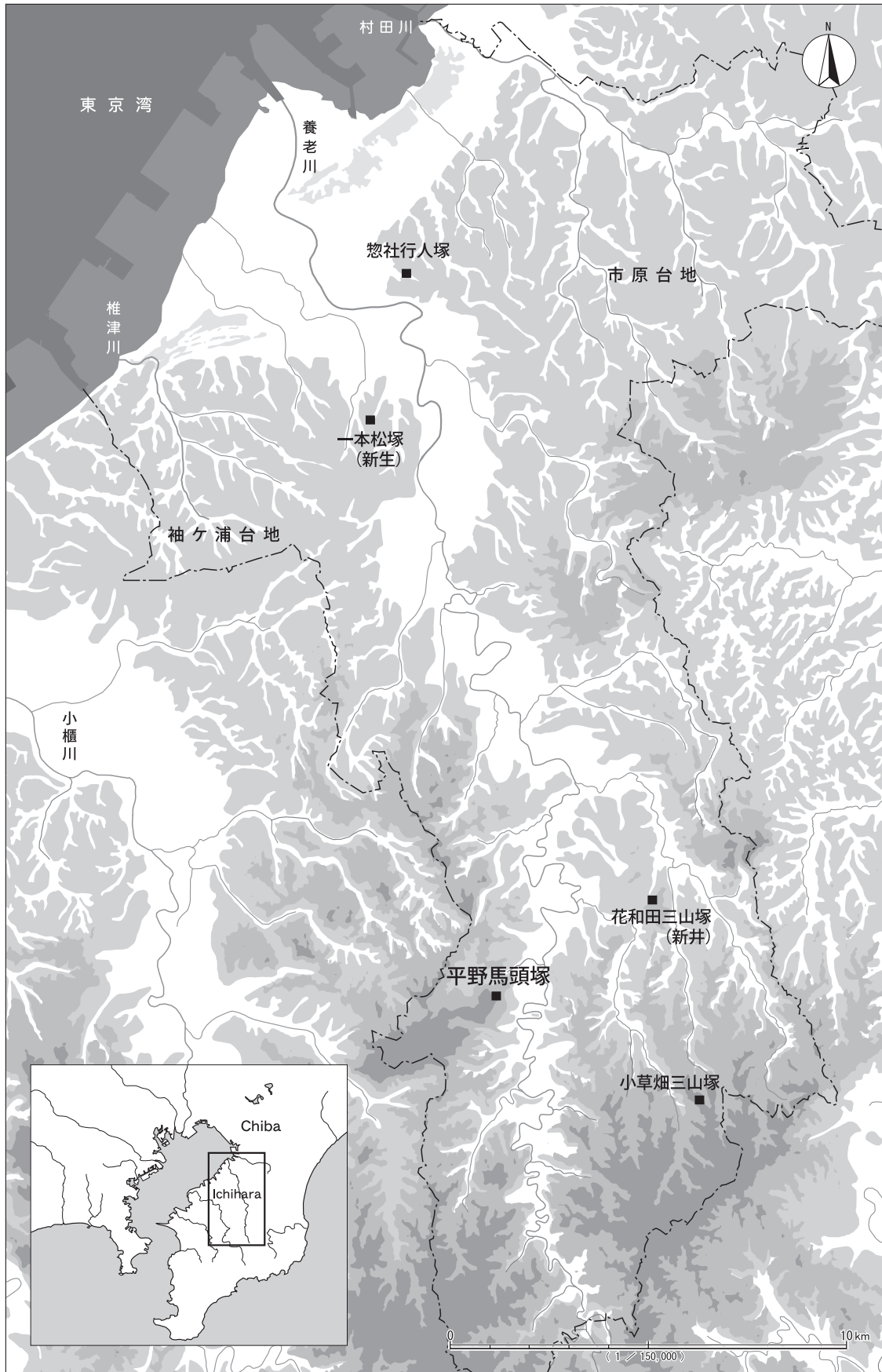
封土中からは、寛永通宝を主体とする銭貨が多く出土し、総数は952枚（重量3,090.9g）を数える。銭を撒きながら土を盛る行為が相当数に渡って行われており、堆積や分布などからみて、8段階32単位に分けてその行為を想定することができる。特に塚の中央下半部に数多く集中し、最下層には、寛永通宝158枚と共に漆塗の木質鏡箱に納められた銅鏡1面と数珠玉54粒が検出された。塚を築造し始める際の地鎮祭祀の跡とみられる。出土した寛永通宝が、古寛永及び新寛永の文銭のみで構成されていたことから推定し、17世紀末頃の築造と考えられる。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1・2図、図版扉）

平野馬頭塚は、蛇行しながら北へと流れる養老川上流域の左岸、標高155m前後の丘陵上に築かれている。広域的にみれば、姉崎付近の旧海岸線まで北西18.5km、木更津市街まで西北西21km、外房の一宮の海岸線まで東に22.8kmの位置にあたり、出羽三山の月山山頂まではほぼ真北に358kmの距離がある。最も近い大戸の集落まで南東に700mであり、その比高差は80mほどを測る。北方500mに養老川支流の万田野川が流れるが、その水面との比高差は100mを超える急峻な地形である。その万田野川と養老川に開析された丘陵上に、長さ800m、最大幅450mほどの平坦面があり、平地が北東に向かって落ちていく斜面の端部に、塚は位置する。

この斜面は平野の集落へと下りていく道があり、集落までは北東に1kmほどである。明治15年測量の迅速図にも記された道である。この道を平野の集落から上がってくると、斜面を登りきって平坦になる場所の左手50mほど奥に塚が築かれている。現状は高木に東側の視界を遮られているが、当時は



第1図 調査遺跡位置図



(市原市基本図1/2500、昭和155年測図より)

第2図 平野馬頭塚周辺地形図

0 400m
(1/8,000)

大戸と平野の集落から養老川までを見渡すことができたのではないだろうか。塚は、信仰の聖域に相応しい人里離れた高台に築かれたものと推察できる。

周辺は良質な砂利を含む万田野礫層が分布していることから、大正年間の小湊鉄道敷設時の砂利採取痕が、崖の斜面から横穴状に無数に掘られており、そのため付近の一部の地面は大きく陥没している。現在でも近隣では大規模に砂利の採取が進められている地域である。

第2節 歴史的環境（第1・2図）

前述のような理由から、塚は山林のなかに築かれ、信仰の消滅とともに人も寄りつかなくなり、手入れをなされずにあったもので、近隣住民にもその存在を知らない者が少なからずいる状況である。しかし、市内各地には今なお出羽三山の信仰が息づいており、上高根のように県指定の無形民俗文化財に指定されている地区もある。

近隣では柿の木台地区は今も三山登拝や講行事などを続けているが、この塚を築いた中心とみられる平野・大戸地区では信仰は途絶えている。地元での聞き取りでは、明治期にはすでになかったのでは、という話もある。塚に無数に生えたシイの大木やヒノキの株の太さをみても、確かにそれくらいの時は過ぎているであろうことが予想された。

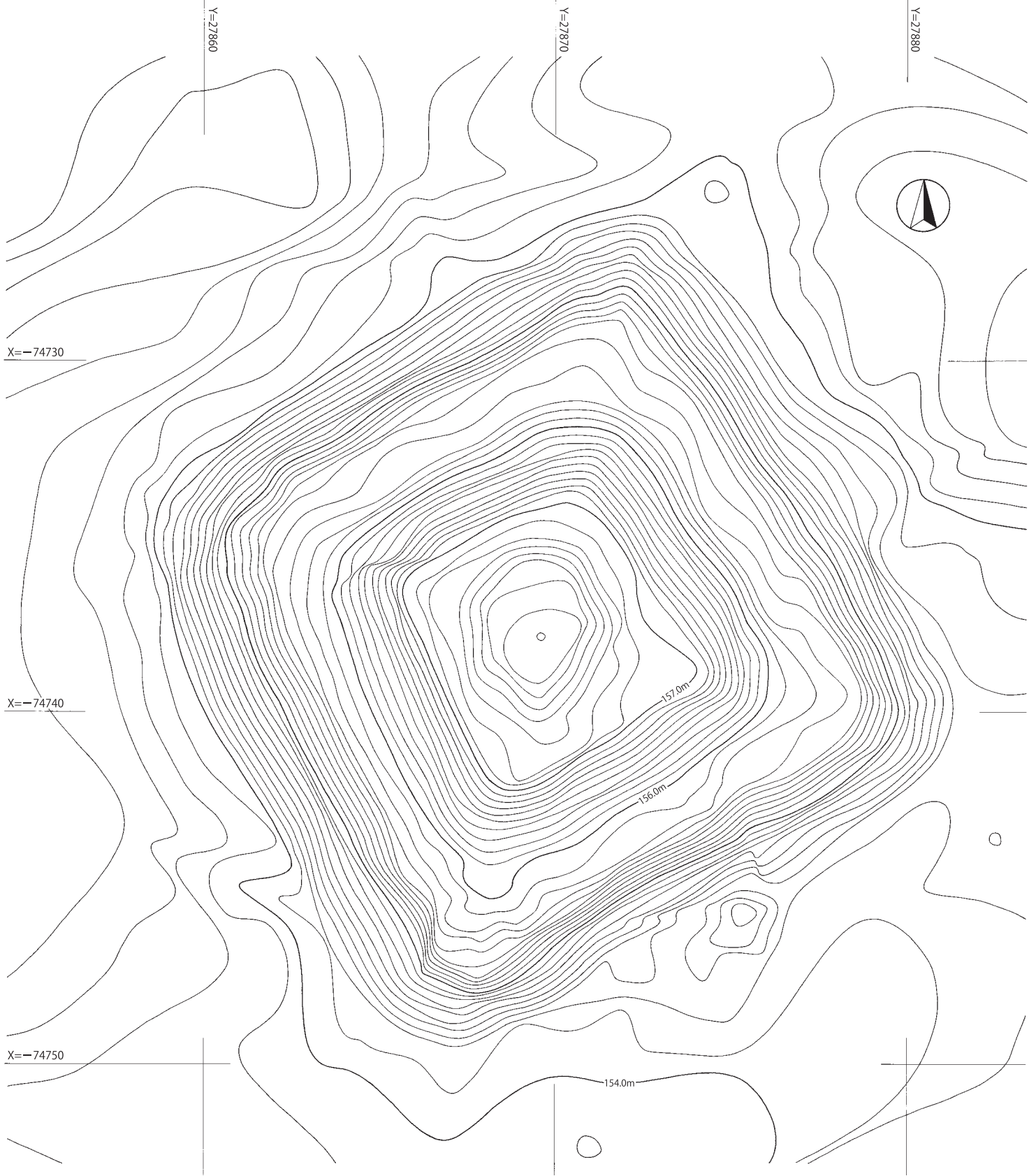
市原市内の出羽三山信仰については、自らも出羽三山神社の里大先達の称号をもつ行人である對馬郁夫氏の研究に詳しく、下記の文献によりたい。供養塚と石塔の造立が信仰の特色のひとつでもあり、市原市内にはそのような塚が150基以上知られている。市内の最も古い信仰関連物は、寛永7年（1630）の銘文を刻む石塔台座が北青柳の供養塚にある。その後元禄期（1688～）から広がりを見せる。塚上やその周囲に石塔が群れをなすのが通例であるが、平野馬頭塚にはそれが一切みられなかった。

塚の南方700mにある真高寺の山門前に出羽三山信仰を示す石塔が立ち、對馬氏の石塔分類によれば第6類「廻国巡礼塔」である。石柱上に傘を有し、安永7年（1778）の銘がみられる（図版10）。ただ、この場所に据えられた経緯は知られていない。この石碑背面に「願主田辺久左衛門／大戸村／十全村行人塚」とあり、大戸村の大旦那田辺氏のもと、13の村々が寄り合い協力して塚に石碑を造立したことが伺われる。村ごとには「行人塚」と呼ぶ小規模な塚を築いており（例えば東飯給の自治会館敷地隅にみられる2m四方ほどの塚、天明元年（1781）八日講中の石碑あり）、13村の行人塚と銘打つからには、規模もそれなりに大きいものと推測される。この石碑が平野馬頭塚の頂部に据えられていたとしても不自然ではない。しかし、塚と真高寺との間、塚から南南西320mの一段低い平場には、釜ノ台馬頭塚と呼ばれる比較的大型の塚2基（分布地図による数値 1号塚：16.35×17.67m・高さ3.5m／2号塚：15.1×14.87m・高さ3.5m）が並んで築かれており、このどちらかの塚の石塔であった可能性も考えられるため、憶測の域を出ない。

この塚や前述の2基の塚が「馬頭塚」と呼ばれることについて、塚が三山の供養塚として機能を果たさなくなった後に、馬頭観音が祀られていたことが推測される。しかしその経緯についても、今となっては知る者はいない。付近には、石造の馬頭観音像が2駆置かれており（第2図・図版10）、そのうち、塚の南西150mに座する馬頭観音像は、幕末の元治2年（1865）の銘を有する。この塚が出羽三山信仰の供養塚として利用されなくなった後の年号として、ちょうど良い頃合いではある。平野へとつながる道沿いにあり、側面には平野村の佐久間氏の名が刻まれる。場所的にも年代的にも強い関連性が想定されるが、断定はできない。また、真高寺の石塔に向かって右隣にも石造馬頭観音立像があり、風化が進んでいるが寛保年間（1741～44）の銘がみられる。

なお、第1図に示した惣社行人塚や一本松塚などは、これまでに発掘調査を行い、その構造や祭祀などがある程度把握された主な供養塚である。各塚で異なる様相を呈しており、その内容と比較については第4章で記述する。

参考文献：對馬郁夫 1988「市原市の出羽三山信仰に関する研究」『市原地方史研究第15号』市原市教育委員会

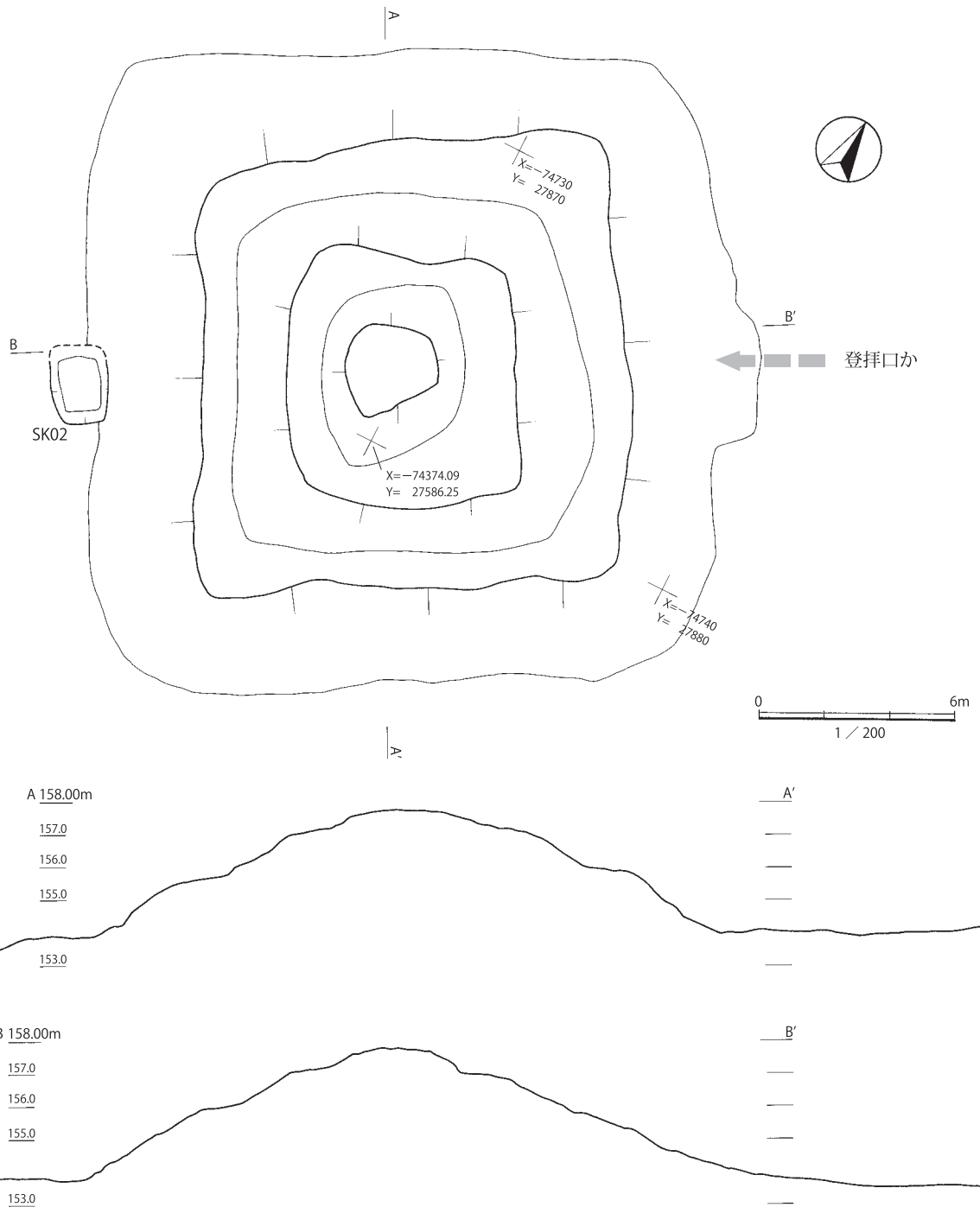


第3図 塚調査前等高線図(S = 1/150)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査前に塚上及び周囲の樹木を伐採し、等高線図を作成した。平面十文字に幅50～80cmの土層観察用ベルトを設定し、ベルトによって4つに分割されたエリアの東側をA区、南をB区、西をC区、



第4図 塚全体図・エレベーション図

北をD区とした。塚の封土は、周辺の表土及びその下層土を削ることで塚に盛りられている可能性が高いと考え、ベルト延長線上の現況エレベーション（第4図）を実測した。塚を構成する3段を上層から1層・2層・3層と呼称した。1層および2層上半は、塚上での何らかの供養祭祀の痕跡を見極めるため手で掘り下げ、2層下半あたりから部分的に重機も併用し、掘り下げていった。土層観察用ベルトは旧表土まで残すと垂直4mの高さになるため、1・2層分は実測後に除去し、3層分のみを最後まで残した。

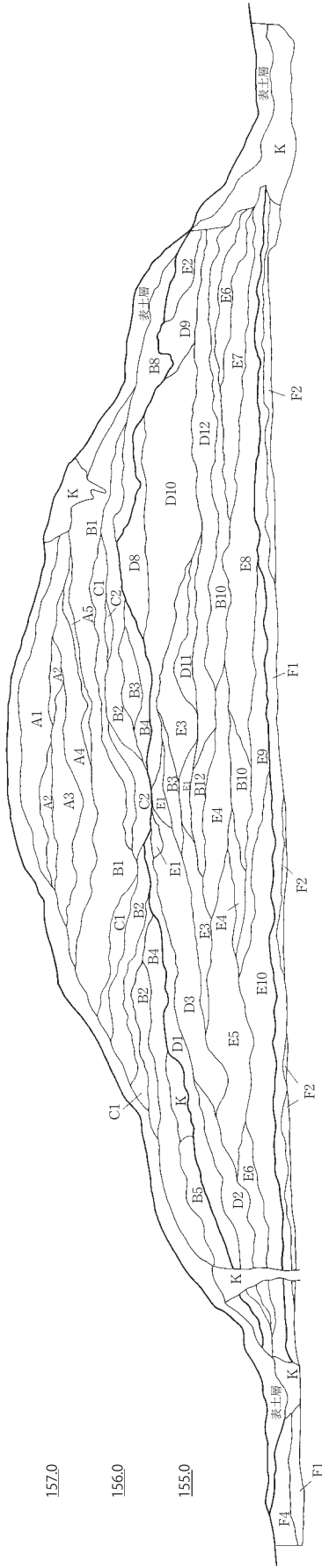
塚は樹木に覆われており、その根を取り去る作業が難航した。塚の築造に関わる遺物はその場に残留し、分布を記録した。封土内には縄文土器と礫(被熱礫・礫石器)が多く含まれていたが、これらは原位置の状態ではなく周囲から動かされた遺物のため、出土エリアと層位のみを記録した。

A 158.00m

157.0

156.0

155.0

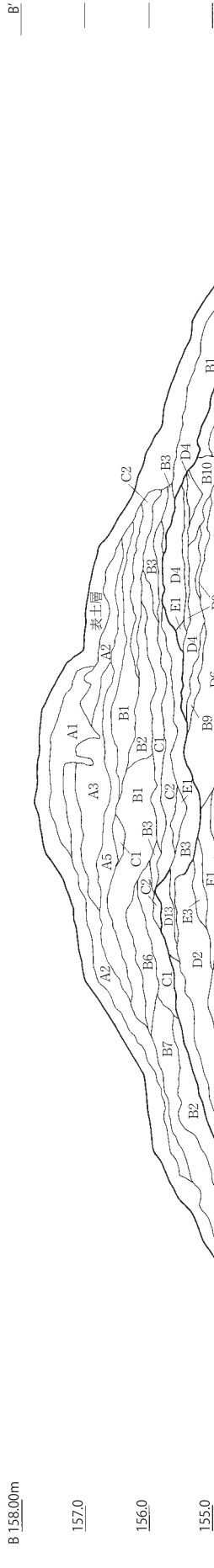


B 158.00m

157.0

156.0

155.0



表土層：根の影響が著しく乾燥進む塚表面の土

A：褐色土～暗褐色土ベース 明暗色層が交互に積まれる層の様子を観察できる

- 1 褐色～暗褐色 しまりなくハサガハサ
- 2 褐色～暗褐色 明褐色粘土 (いわゆるゆるソフトロームより明白色) 混ざる
- 3 褐色～暗褐色 暗褐色
- 4 褐色～暗褐色 明褐色粘土多く混ざる
- 5 褐色～暗褐色 A4層よりさらに明褐色粘土を多く含む

B：黒色土～黒褐色土ベース 混ざり少ない

- 1 黒褐色 しまり弱い
- 2 黒褐色 明褐色粘土少量まざりやや明色 この層から下層は概ねしまり強くなる
- 3 黒色 黒色味強い
- 4 黒色 B3層より黒色強い
- 5 黒色 明褐色粘土少量 しまり弱い
- 6 黒色 混ざりなし しまり弱い
- 7 黒色 ソフトローム混ざる
- 8 黒褐色 ロームプロック (~10mm) 多い
- 9 黒褐色 ロームプロック (~20mm) 混ざる
- 10 黒褐色～褐色 混ざりがほとんどみられないがやや明色
- 11 黒褐色～暗褐色 ソフトロームほど混ざる
- 12 黒褐色 炭化物粒・炭化材を多く含む SK02 覆土
- 13 黒色

C：黒褐色土ベースに明褐色粘土 (ソフトロームと異なり明白色系粘土か) 混ざる

- 1 黒褐色 明褐色粘土を含む
 - 2 黒褐色 C1層より明褐色粘土少なめ
- D：褐色土～黄褐色粘土ベース ロームプロック多く含む
- 1 褐色～黄褐色 ロームプロック (~15mm) 少量
 - 2 暗褐色～黄褐色 ロームプロック (~20mm) 多い D1層より暗褐色
 - 3 褐色～黄褐色 ロームプロック (~15mm) 2層より少なく暗褐色
 - 4 褐色～黄褐色 ロームプロック (~10mm) 少ない
 - 5 暗褐色～黄褐色 やや黒色がかかる ロームプロック (~10mm) 少なめ
 - 6 褐色～黄褐色 ロームプロック (~15mm) D7層より少ない
 - 7 褐色～黄褐色 ロームプロック (~20mm) 多量
 - 8 褐色～黄褐色 ロームプロック (~10mm) 多い
 - 9 褐色～黄褐色 ロームプロック (~20mm) 多量
 - 10 暗褐色～褐色 黒褐色粘土プロック (~20mm) まばらに含む
 - 11 暗褐色～褐色 ロームプロック 少ない
 - 12 暗褐色～黄褐色 ロームプロック (~8mm) 多い
 - 13 暗褐色～黄褐色 ロームプロック (~20mm) 多い
 - 14 暗褐色～褐色 D11層よりやや暗褐色 ロームプロック (~30mm) 多い

E：暗褐色～黄褐色粘土ベース 黒色味強くロームプロックも含む

- 1 暗褐色 ローム分含みややや黄色味かかる
 - 2 黄褐色 (~5mm) 多い
 - 3 暗褐色 黒色味強くロームプロック (~10mm) 少量
 - 4 暗褐色 混ざり少ない
 - 5 暗褐色 ロームプロック (~30mm) 少量
 - 6 暗褐色 ロームプロック (~40mm) 多い
 - 7 暗褐色 ロームプロック (~20mm) 多い
 - 8 暗褐色 E7層より暗褐色 ロームプロック (~20mm) まばら
 - 9 暗褐色 ロームプロック (~10mm) 少量 ソフトローム混ざる
 - 10 暗褐色 ロームプロック (~20mm) 多い
 - 11 暗褐色 黒色味強くロームプロック (~15mm) 多い
 - 12 黄褐色～暗褐色 黄褐色ロームと暗褐色土が混ざる 土採り跡か
- F：日表土暗灰褐色土層及びソフトローム層
- 1 暗灰褐色 ロームプロック (~10mm) 少量 しまり強い
 - 2 暗灰褐色 F1層とF5層ソフトローム層との漸移層
 - 3 黄灰褐色 F1層とF2層の漸移層
 - 4 黒褐色 日表土層上層 (F1層の本来の上層土)
 - 5 黄褐色 ソフトローム

K：根や動物などの人為的ではない攪乱層

第5図 土層断面図 (S=1/100)

第2節 遺構と出土遺物

(1) 塚

構造 方形3段築成をなし、高さ3.9～4.0m（頂部の標高157.80m）を測る。

外見上の各層の規模（北西-南東×南西-北東の最大長）：**1層** 上面2.9×2.9m・底面5.4×4.4m・高さ0.56～0.80m **2層** 上面8.0×7.1m・底面11.1×11.1m・高さ0.94～1.24m **3層** 上面13.9×13.5m・底面（基底部）19.6×19.2m（北東辺張り出し部 +1.2m）・高さ1.9～2.1m

塚周辺地形のエレベーション観察では、塚の北西側の地形において、見た目でも顕著に周囲が窪む傾向がみてとれた。塚の裾から7mの距離で0.64mほどレベルが下がり、また緩やかに高くなっていく。同様に南西側で0.3m、北東側で0.26mの窪みがみられ、離れるほどゆるやかに高くなる。ただ、南東側は従来の地形のためか、塚の底面から離れるほどレベルが上がっている。このような現況地形をみる限りでは、塚の封土に関しては周囲の土を広く集め、強いてあげれば特に北側は厚く削ったものとみることができる。周溝や設計上の溝跡などは観察されなかった。

最上層の1層はかなりの部位を樹木の根に浸食されており、原型を留めていないものとみられる。2・3層はともに残りが良い。3層の北東面斜面は若干なだらかな傾斜になっており、基底部辺も中央付近で1.2mほど外に流れ張り出した状態が観察される。ここが登拝口であった可能性が高く、正面があるとすればこの面となろう。その場合、塚の軸向きはN-119°-Wとなり、西南西を向く形となる。出羽三山の方角はほぼ真北であり、そのような制約とは関係がないものであろう。東の集落を意識して面する方角などを考慮した結果と考えられる。

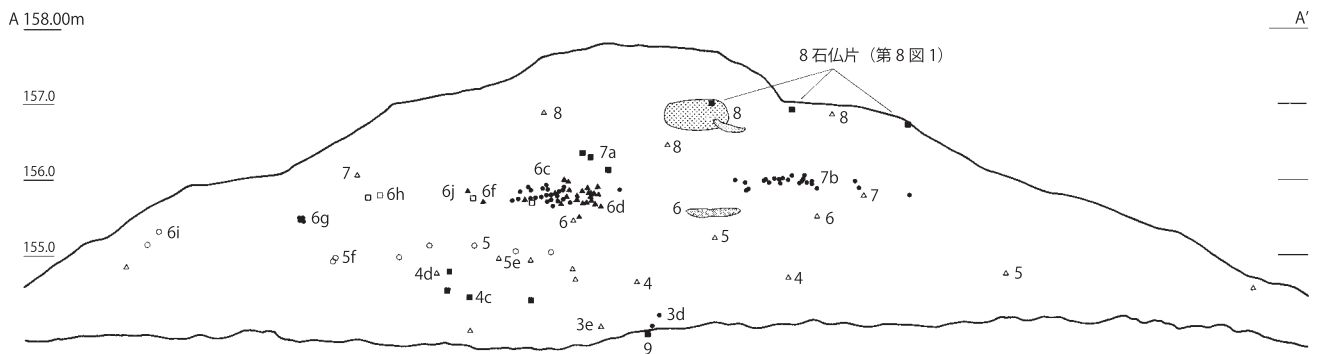
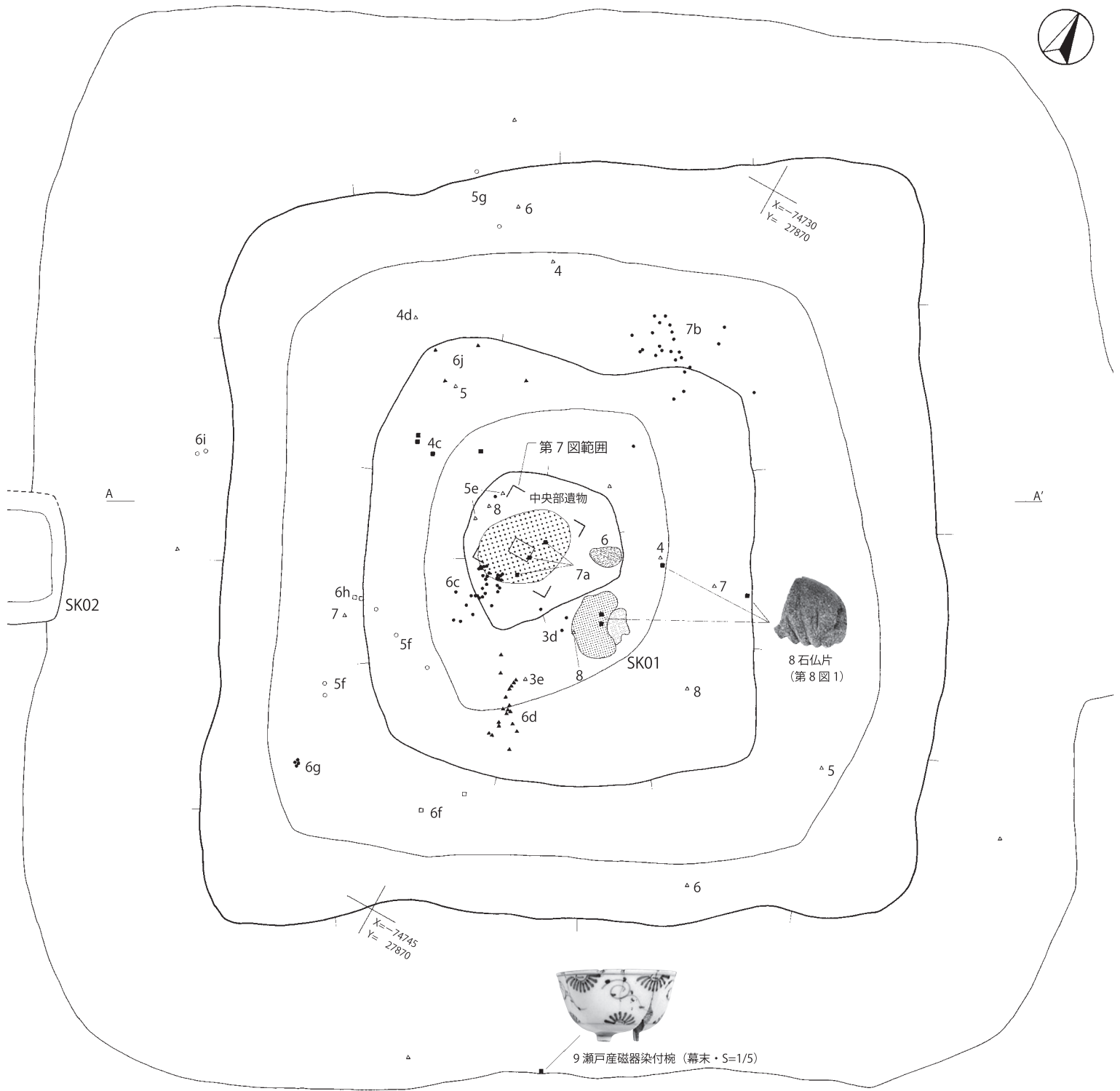
盛土（封土） 3層は基底層であるため、関東ロームの赤土を用い、意識的になだらかな山の形の基礎を作り出している（第5図土層断面図の太いライン）。塚の築造予定地の周囲から土を削りつつ積み上げていくのであれば、最下層に当時の表土層の黒色土、中層に褐色土、最上層に赤土という順番になるところを、先に赤土の混ざる暗褐色土（E土）と赤土（D土）で基礎をつくり固め、その後に黒土を用いて3層を成形している（B土）。

ただ、中央部付近は単位が乱れており、暗色土が周囲より細かい単位で積まれる。したがって、なだらかな山の東西南北の赤土の層がうまくつながらない。当初は四方から積み上げる際の各担当の力量差かと思われたが、銭の出土分布状況からみて、中央部分を特別視し、銭を撒く度に暗色系の土をかぶせているということが判明した。

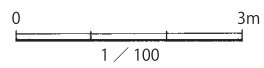
また、2層目から1層目にかけては褐色土（A土）主体で成形するが、ローム層の黄色土とは異なる白色系の粘土が混ざる土を褐色土と互層になるように積み上げているように観察できる。これは塚外見上や機能面には特に表れない部分でもあり、周囲各場所の土を積み上げる担当の人々が交互に登る順番が影響する単位の表れかと思われる。

各層の所見 1層上面では、石碑の基礎痕や梵天供養などの埋納遺構が予想されたものの、そのような痕跡は確認できなかった。封土はしまりが弱く、樹木の根が大きく張った部分のみが残存した形である。明褐色粘土を含む暗褐色土と含まない土が互層になるような積み方をしており、その傾向が2層下半まで続く。出土遺物もみられなかった。

2層から黒色土主体の土が多くなり、封土全体にしまりがでてくる。2層上面からは遺物が散見される。第8図1は砂岩製の石仏の握り拳とみられる。付近からは同一の石で面を作り出している破片



第6図 出土遺物分布図(塚全体)



が3点出土している。封土内に偶然入りこんだ可能性も否定できないが、2層上面でのなんらかの祭祀行為と関連があり、その過程で破損したものと考えた方が妥当であろう。

遺物（銭）が目立って出土するようになるのは3層上面からである。出土状況をみると、塚の四隅を意識した分布はまったくみられず、平面的にみて2層目の下場ラインより外側のエリアからの出土は、ほんのわずかしかなかった。それに対して、平面的にはわずかな面積である中央部分から、全体量の8割を超える銭が出土した。第6図には「中央部遺物」として網点トーンをかけてあり、第7図においてその部分の拡大図を掲載した。さらにトーン内の口は、鏡の埋納などの地鎮祭祀が行われた部分（第7図右図で拡大）であり、平面的には塚の中心から若干西に寄っていることがわかる。

地鎮祭祀および撒き銭行為の段階

銭の出土分布をみると、平面的かつ垂直的なまとまりがあり、それがある程度グループ分けが可能であることがわかる。このことは、塚を築造するにあたっての地鎮祭祀跡及び撒き銭行為の跡という位置づけが可能であろう。これらは大きく分けて、中央部での地鎮祭祀が下記の3段階8単位、その後の広い範囲での撒き銭行為が5段階24単位に分類案が提示できる。最小単位は銭2枚以上とした。築造の順に、出土位置の平面的な分布及び層位的なまとまりを考慮し、最下層の祭祀1から2層上面での行為を8、そして塚完成後の使用時を9という段階に設定した。また、各段階の中の分布的まとまりによって細分し、便宜的に中央から周囲に向かってa～のアルファベットをつけた。1枚のみの単独出土も17カ所で確認され、レベルに応じて段階の数字のみを記した。

・地鎮祭祀 1a～3e（第7図右図）

1a：地鎮祭祀の始め 設計上の中央部分に、推定平面規模10×6cm・深さ17cmほどの小孔を旧表土上から穿ち、寛永通宝（新寛永文銭）を4枚入れる。土で埋め戻す。

1b：孔付近に25×15cmほどの範囲で56枚の銭を撒く。5～8cmほどの厚さで土をかぶせる。

2：地鎮祭祀メイン儀式 鏡・数珠玉の埋納 漆塗の鏡箱に納めた銅鏡（第8図2）を鏡面上向きで置く（除魔・奉養）。数珠玉54粒以上（紐を切って散らす）と銭158枚（全段階中最多枚数、古寛永48・新寛永101・中世銭2・不明7）を40×33cmの範囲で撒く（図版4・5）。

3a～3e：2の直上層にa:14枚（鏡付近）、b:10枚（鏡付近90×50cmの範囲で9枚・鏡から1.4m北に1枚）、c:50枚（鏡付近・60×40cm）、d:11枚・e:5枚（鏡の南東1.5～2m）を撒く。

・撒き銭 4a～8（第7図左図・第6図）

4a・4b：3の上に20～30cmの土を盛った後に4a:40枚、4b:3枚を20×170cmと細長く撒く。

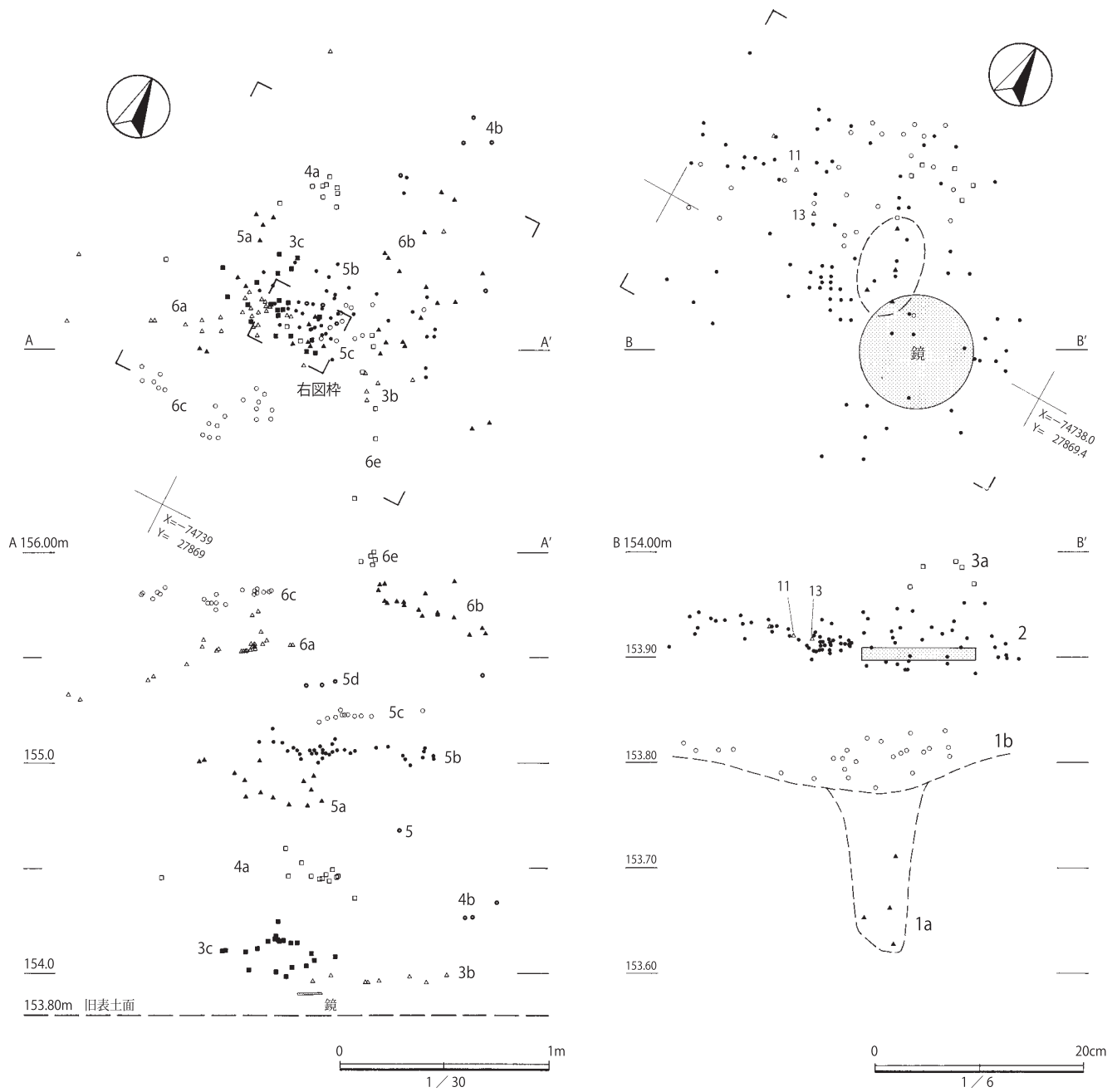
4c・4d：中央から西に2mほど離れた辺りで4c:4枚、5mほどで4d:6枚（銭差状）を撒く。

5a～5e：中央部の4aの上に20cmほど盛った後、5a:40枚・5b:124枚・5c:89枚・5d:9枚・5e:7枚の計269枚を撒く。aからdまでは60cmほどの厚みがあり、撒いて土をかぶせる行為を繰り返したものとみられる。この269枚のうち、錆で固着し銭文不明のものが187枚みられる（図版4・6）。

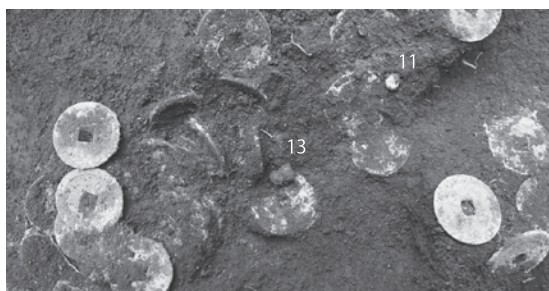
5f・5g：中央から3mほど南に離れて5f:5枚、6mほど北西で5g:2枚を撒く。

6a～6c・6e：中央部、a:59枚・b:58枚・c:77枚・e:10枚の計204枚を4回に分け、撒いて埋める行為を繰り返す。厚みは40cmほど。

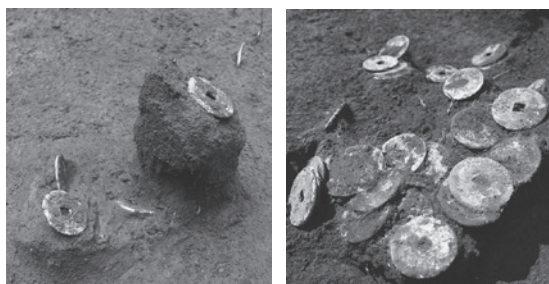
炭化物6：中央部の東側に、平面58×38cm・厚さ12cmの範囲で炭化物が堆積していた。その場で燃焼した痕跡は認められないが、6段階での祭祀行為に関わる可能性も考えられる。



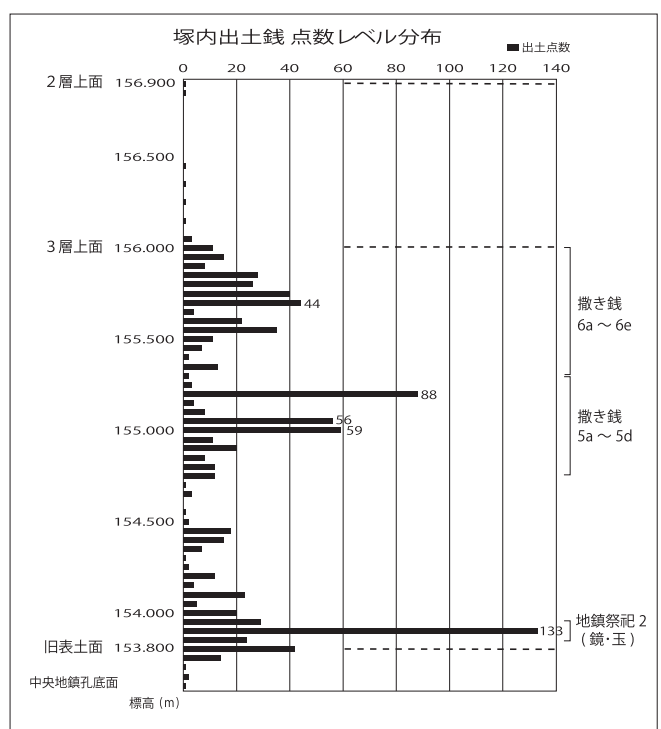
第7図 出土遺物分布図(塚中央部)



地鎮祭祀2 ガラス製の玉(11)と2個付着した木玉(13)の出土状況 北西から



地鎮祭祀1a 新寛永4枚を小孔に投入 地鎮祭祀1b 1aの孔を埋め、56枚を置く



6d：中央から3mほど南で19枚（180×60cm）。赤土（D土）中に撒き、赤土で埋める。6cとほぼ同レベルであり、分布の広がる方向も似ることから連続性をもつ可能性が考えられる。

6f～6j：少数枚を広く周囲に散らす。f：2枚・g：4枚・h：2枚・i：2枚・j：4枚

7a：中央部において3枚を撒く。中央部での最後の撒き銭。ちょうど3層の上面である。

7b：中央から北に4～5mほどで25枚を撒く。1.7×1.5mに分散し、撒いた感じが良くわかる。（図版2）他に3層上面で2カ所から1枚ずつ出土している。

8：2層上面の行為であり、中央部1枚、SK01底面（推定）1枚、中央から東4mに1枚の3枚のみであった。SK01の詳細は後述するが、土坑としてのプランは認められず、焼土と炭化材が厚く集積していた。状況からみて8段階の2層上面から掘り込み、焚火跡を片づけたものを投入したのではないかと推察される。焼土下から寛永通宝1枚が出土している。

・塚完成後

9：塚の使用 塚の表層には使用実態のわかる痕跡がない。ただ、第6図中に示した幕末頃の所産とみられる瀬戸産の染付椀が、2層の表土層と南辺裾表土層部分から出土している。少なくとも幕末頃にはこの塚で椀を使う行為を行っていたことを示すものと考えられよう。

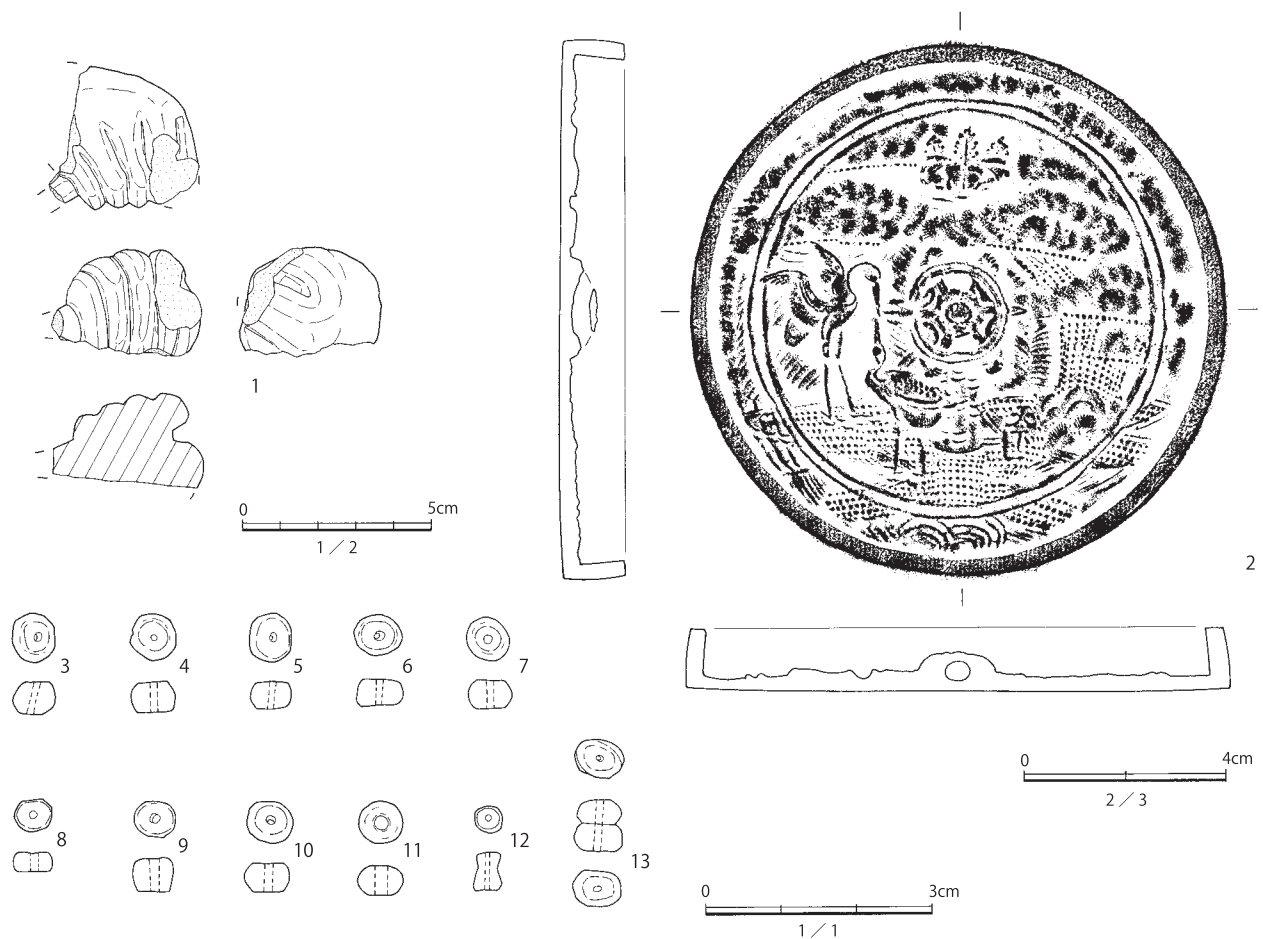
出土銭 使用された銭は、古寛永228枚・新寛永（すべて文銭）401枚・新古不明寛永通宝39枚・宋銭など中世銭10枚・銭文不明274枚の計952枚3,090.90gである。これらの種別からみた出土分布は平面的にも層位的にも完全にランダムであり、築造時に用意できた銭を、種別は拘らずに使用したものとみてよい。第9・10図にはその約1割量の拓影図を掲載した。寛永通宝は相対的に保存状態の良いものを選別した上で、文字の特徴が異なるものを選んだものだが、詳細観察の結果の分類ではない。図は、種別ではなく下層からの出土レベル順、つまり、概ね塚の築造にあたって使われた順で並ぶ。ただ、最後の2枚(62・63)は追加掲載したもので、例外となる。掲載遺物が図中のどの点であるかはあまり意味をなさない情報と考え、撒かれた段階別を表2に記した。

枝番号がつく銭は、出土状態が明らかに銭差状であるか、調査時に剥がれず分離できなかったものである。遺物分布図にも点は1点しか落としていないため、すべての銭の点を合わせて500余りであった。特に錆で固着した銭が3層中央部5a～5d段階に顕著にみられ（図版6）、7割以上の銭が銭文不明である。これは周辺を取り巻く土の成分のためなのか否かは判断し難いが、特別その層位だけ異なる土層ではなかったことを考えると、銭を撒いた後にお神酒などをふりかけるなど、錆を生じさせる行為があったのかもしれない。もしくはその段階は雨中の作業だったのかもしれない。

また、銭の出土と土層との関係は、中央部分は周囲に比べると黒～暗褐色土の積み上げ単位が細かく多く堆積していることから、銭を撒いた部分には意識的に赤土を盛ることを避けたものともみられる。ただ、中央部から離れた6dの分布は赤土主体のD土から出土しており（図版2）、やはり中央部分は特別視すべき場所であったことがわかる。

出土遺物 第8図1は石仏の右手拳部分である。2層上面SK01直上から出土しており、付近に同一個体とみられる石片が3点出土している。棒状の持物をとっており、小指脇から突き出ているが、親指側には通っていない。馬頭観音像の通有の持物と比べると、斧の棒状の柄に近いが、親指側に棒が通っていないのは不自然である。

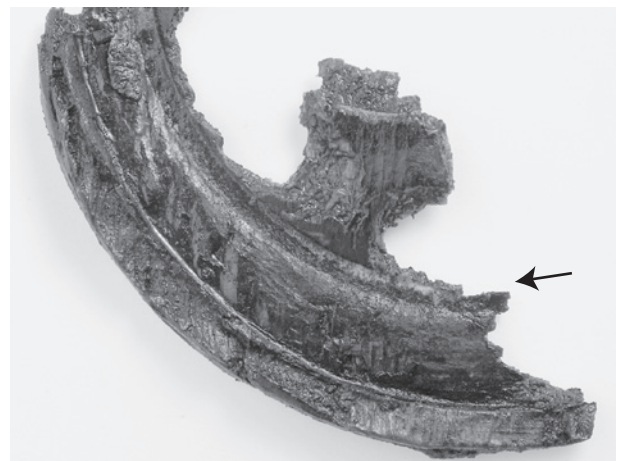
2は青銅製の鏡である。鏡箱に納められ、鏡面上向きで出土した。直径10.8cm、重さ296.2gを計る。



第8図 出土遺物(1)

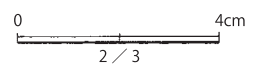
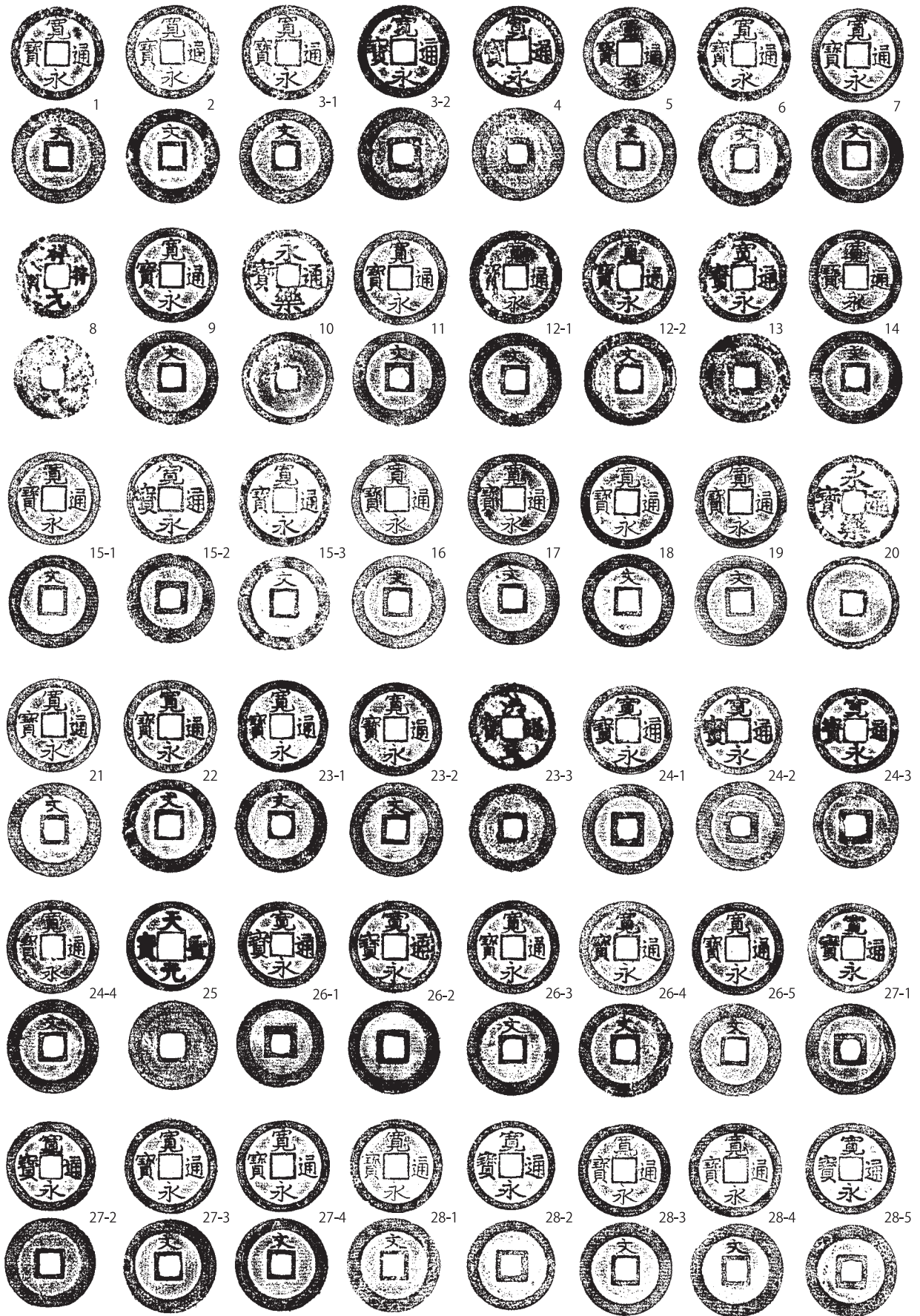
表1 塚中央部出土玉類計測値 (単位は mm)

番号	材質	長径	短径	高さ	孔径	重量 g
3	木質	6.4	4.8	3.8	1.0	0.0500
4	木質	6.2	5.6	3.9	0.8 ~ 1.0	0.0469
5	木質	6.3	5.1	3.5	1.0	0.0383
6	木質	6.1	5.0	3.8	0.9 ~ 1.0	0.0565
7	木質	5.8	5.0	3.8	1.0 ~ 1.1	0.0369
8	木質	4.8	3.8	2.4	1.0	0.0143
9	木質	5.5	4.5	4.1	1.0 ~ 1.1	0.0291
10	木質	6.0	5.1	3.8	1.0	0.0428
11	ガラス	5.8	5.7	4.1	1.4 ~ 1.5	0.2414
12	木質	3.2 ~ 3.5	3.1 ~ 3.4	5.0	0.6	0.0165
13上	木質	5.8	4.0	6.5	0.9 ~ 1.0	0.0642
13下	木質	6.2	4.8	7.5	0.9 ~ 1.0	

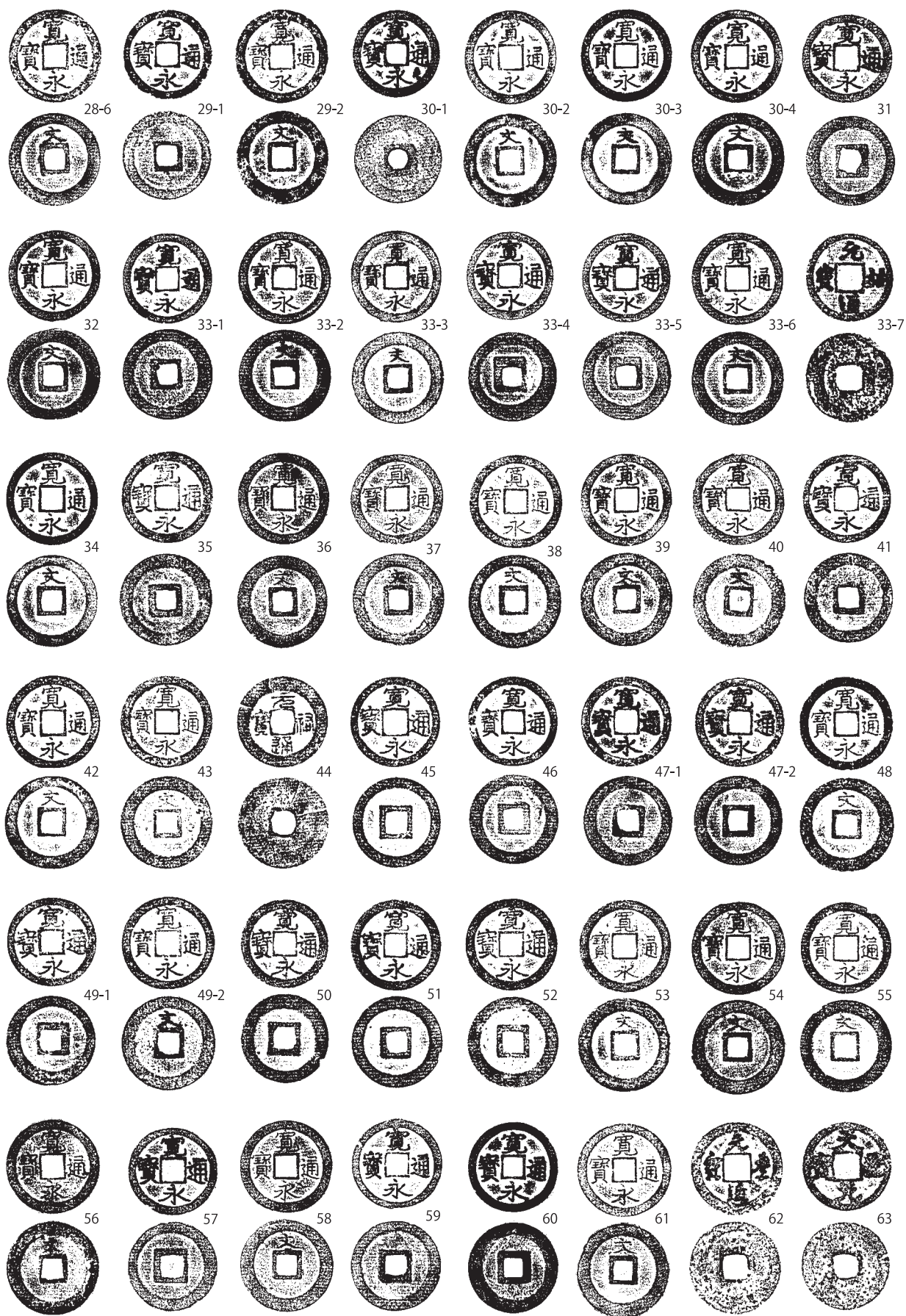


鏡箱底側内面 矢印の指す円状痕は鏡の縁が当たっていた跡

柄がとりついた痕跡はない。厚みのある直角縁で、鏡背面に亀の鈕をもつ。二重圏線の内区に桐・松・鶴・亀の吉祥文様を並べ、2羽の鶴と鈕の亀は嘴を接する。外区にも松葉や浜や波などの表現がはみ出す。鈕の右下に「天下一」と記されるが、作者銘などはみられない。鈕孔内に長さ1.3cm・太さ2mmほどの紐が残る(図版7右上)。鏡の大衆化が進み、文様構成は縁起物として一般的に数多くみられ、江戸時代全般に大量に流通していたものである。ただ、ふみ返しの粗悪な鏡よりは松葉の彫りなどもしっかりしている。寛永通宝の文銭から推定し、江戸時代前半期の鏡と考えておきたい。



第9圖 出土遺物(2)



第10圖 出土遺物(3)

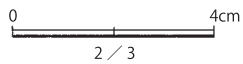
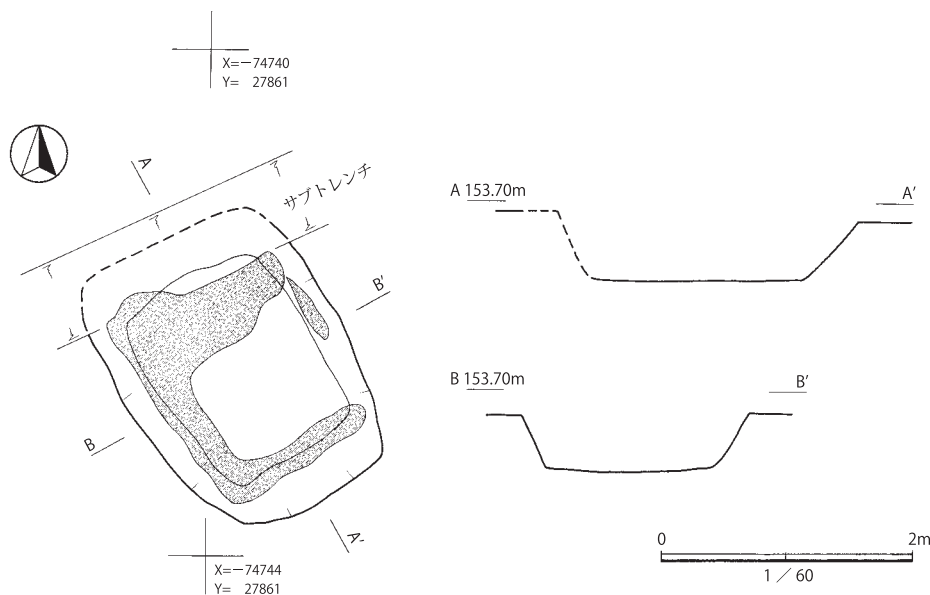


表2 平野馬頭塚出土銭観察表

挿図番号	掲載番号	枝番	銭文	種別※	直径cm	縁厚cm	重量g	段階
10	62		元豊通宝	3	2.54	0.12	2.8	1b
9	1		寛永通宝	2	2.58	0.14	3.3	1b
9	2		寛永通宝	2	2.56	0.13	3.2	1b
9	3	1	寛永通宝	2	2.57	0.15	3.6	1b
9		2	寛永通宝	1	2.51	0.12	3.0	
10	63		天聖元宝	3	2.42	0.10	2.4	1b
9	4		寛永通宝	1	2.50	0.13	3.1	1b
9	5		寛永通宝	2	2.55	0.13	3.5	2
9	6		寛永通宝	2	2.56	0.13	3.0	2
9	7		寛永通宝	2	2.55	0.14	3.0	2
9	8		祥符元宝	3	2.31	0.15	2.7	2
9	9		寛永通宝	2	2.56	0.14	4.0	2
9	10		永樂通宝	3	2.49	0.13	3.9	2
9	11		寛永通宝	2	2.56	0.14	3.2	2
9	12	1	寛永通宝	2	2.55	0.14	4.0	2
9		2	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.3	
9	13		寛永通宝	1	2.46	0.13	3.0	2
9	14		寛永通宝	2	2.55	0.14	3.1	5
9	15	1	寛永通宝	2	2.52	0.13	3.4	4d
9		2	寛永通宝	1	2.44	0.12	2.8	
9		3	寛永通宝	2	2.53	0.14	3.7	
9	16		寛永通宝	2	2.53	0.13	2.5	5
9	17		寛永通宝	2	2.53	0.14	3.1	6i
9	18		寛永通宝	2	2.52	0.14	3.2	5
9	19		寛永通宝	2	2.52	0.14	2.9	6i
9	20		永樂通宝	3	2.51	0.13	2.3	6g
9	21		寛永通宝	2	2.55	0.13	2.4	6
9	22		寛永通宝	2	2.55	0.12	3.3	6a
9	23	1	寛永通宝	2	2.52	0.15	4.0	6a
9		2	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.6	
9		3	洪武通宝	3	2.37	0.13	2.8	
9	24	1	寛永通宝	1	2.47	0.12	3.1	6a
9		2	寛永通宝	1	2.45	0.13	3.5	
9		3	寛永通宝	1	2.34	0.12	3.1	
9		4	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.4	
9	25		天聖元宝	3	2.43	0.12	3.4	6a
9	26	1	寛永通宝	1	2.43	0.15	4.2	6a
9		2	寛永通宝	1	2.52	0.12	3.3	
9		3	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.4	
9		4	寛永通宝	2	2.57	0.14	3.6	
9		5	寛永通宝	2	2.53	0.13	3.1	
9	27	1	寛永通宝	1	2.46	0.13	3.5	6a
9		2	寛永通宝	1	2.46	0.14	3.5	
9		3	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.4	
9		4	寛永通宝	2	2.53	0.14	3.7	
9	28	1	寛永通宝	2	2.55	0.14	3.7	6b
9		2	寛永通宝	1	2.41	0.12	2.7	
9		3	寛永通宝	2	2.53	0.13	3.5	

挿図番号	掲載番号	枝番	銭文	種別※	直径cm	縁厚cm	重量g	段階
9	28	4	寛永通宝	2	2.54	0.13	3.5	6b
9		5	寛永通宝	1	2.48	0.13	3.6	
10		6	寛永通宝	2	2.53	0.13	3.6	
10	29	1	寛永通宝	1	2.43	0.12	3.1	6b
10		2	寛永通宝	2	2.55	0.13	3.0	
10	30	1	寛永通宝	1	2.40	0.13	3.5	6b
10		2	寛永通宝	2	2.55	0.12	3.2	
10		3	寛永通宝	2	2.51	0.13	3.2	
10		4	寛永通宝	2	2.52	0.12	3.4	
10	31		寛永通宝	1	2.49	0.13	2.6	6d
10	32		寛永通宝	2	2.55	0.13	3.1	6j
10	33	1	寛永通宝	1	2.46	0.11	3.5	6b
10		2	寛永通宝	2	2.52	0.12	3.5	
10		3	寛永通宝	2	2.53	0.14	4.3	
10		4	寛永通宝	1	2.53	0.15	3.6	
10		5	寛永通宝	1	2.43	0.12	3.9	
10		6	寛永通宝	2	2.55	0.13	2.9	
10		7	元祐通宝	3	2.43	0.11	2.5	
10	34		寛永通宝	2	2.52	0.13	2.7	6b
10	35		寛永通宝	1	2.54	0.13	3.3	6c
10	36		寛永通宝	2	2.52	0.14	3.4	6j
10	37		寛永通宝	2	2.53	0.14	3.6	6c
10	38		寛永通宝	2	2.55	0.13	2.9	6c
10	39		寛永通宝	2	2.53	0.14	3.3	6c
10	40		寛永通宝	2	2.55	0.14	3.1	7
10	41		寛永通宝	1	2.43	0.13	3.4	6c
10	42		寛永通宝	2	2.55	0.12	2.4	6c
10	43		寛永通宝	2	2.53	0.13	3.3	6c
10	44		元祐通宝	3	2.50	0.11	2.5	6c
10	45		寛永通宝	1	2.46	0.14	3.0	6d
10	46		寛永通宝	1	2.45	0.14	3.5	6c
10	47	1	寛永通宝	1	2.44	0.12	3.4	6c
10		2	寛永通宝	1	2.44	0.14	3.6	
10	48		寛永通宝	2	2.56	0.13	3.0	6c
10	49	1	寛永通宝	1	2.45	0.11	2.9	6c
10		2	寛永通宝	2	2.55	0.14	4.0	
10	50		寛永通宝	1	2.43	0.13	3.1	7b
10	51		寛永通宝	1	2.55	0.13	3.1	7b
10	52		寛永通宝	1	2.51	0.14	3.5	7b
10	53		寛永通宝	2	2.55	0.13	3.2	7b
10	54		寛永通宝	2	2.55	0.13	2.2	6e
10	55		寛永通宝	2	2.51	0.13	2.4	7b
10	56		寛永通宝	2	2.55	0.14	3.7	6e
10	57		寛永通宝	1	2.44	0.10	1.8	7b
10	58		寛永通宝	2	2.55	0.13	2.9	7b
10	59		寛永通宝	1	2.50	0.12	1.9	7b
10	60		寛永通宝	1	2.48	0.11	2.7	7
10	61		寛永通宝	2	2.55	0.14	2.8	8

※種別 1：古寛永 2：新寛永（文銭） 3：宋銭等の中世銭



第11図 SK02実測図



SK02 南東から

鏡箱の蓋外面には黒漆地に赤漆とみられる線によって文様が入る（図版6下段）。植物の茎と花卉を描いたものとみられるが、遺存状況が悪くはっきりとしない。底側の内外面にも黒漆塗りを施す。底側は部分的に残りが良く、推定径は13.6cm、側面板の厚みは4.0～5.5mmとしっかりしており、底面板の厚みは1.5mm前後を測る（P13挿入写真・図版6中段）。

第8図3～13は数珠玉とみられる。すべて鏡の周辺から出土しており、鏡とともに奉納されたものである。本来の数珠の連続的な形状を保った出土状況ではなく、祭祀によって紐が切れ、小範囲に散らしたものとみられる。木質の玉（3～10・12・13）は一様に黒褐色を呈するため、黒漆塗などが施されている可能性がある。12は瓢型を呈している。13は2個の玉が密着した状態で出土したため、その様子を保持し、剥離しないまま掲載した。

11は内部に細かな気泡が観察できるため、ガラス製とみられる。この他に、真珠製とみられる玉が2点（脆く崩れかかっており図示はしていない）、木質の玉が39点出土しており（図版6）、総数は54点（木質51・真珠2・ガラス1）を数える。ガラスや真珠製の玉は、木製玉の連続のなかの要所に入る特別な玉であったとみられる。

他に、和紙状の小片や藁が付着した銭がみられ、写真のみ掲載した（図版7）。撒き銭6aから出土した銭差状の3枚重ね（図版7中段右端）は、一方の面には藁が全面的に付着し、反対側の面に藁筋が貫通している状態が観察された。藁による銭差の端部とみられる。

（2）土坑

SK01（第6図・図版2）

規模：1.22×1.08m・深さ：42cm（推定） 周囲の土層と区別できないため、土坑としての平面プランや断面での掘り込みラインは確認できない。2層上面、中央からやや東南東に寄ったA区に位置し、焼土・炭化物・粘土ブロックの集積がみられ、規模はその範囲から推定した。底面や壁面が被熱するなどのその場で燃焼した痕跡は観察されない。2層上面（前述段階8）において穴を掘り、焼土や炭化物を投棄したものとみられる。その集積の東寄りに、塚封土中では他にみられない硬質の黒灰色粘土のブロック（～150mm大）が検出

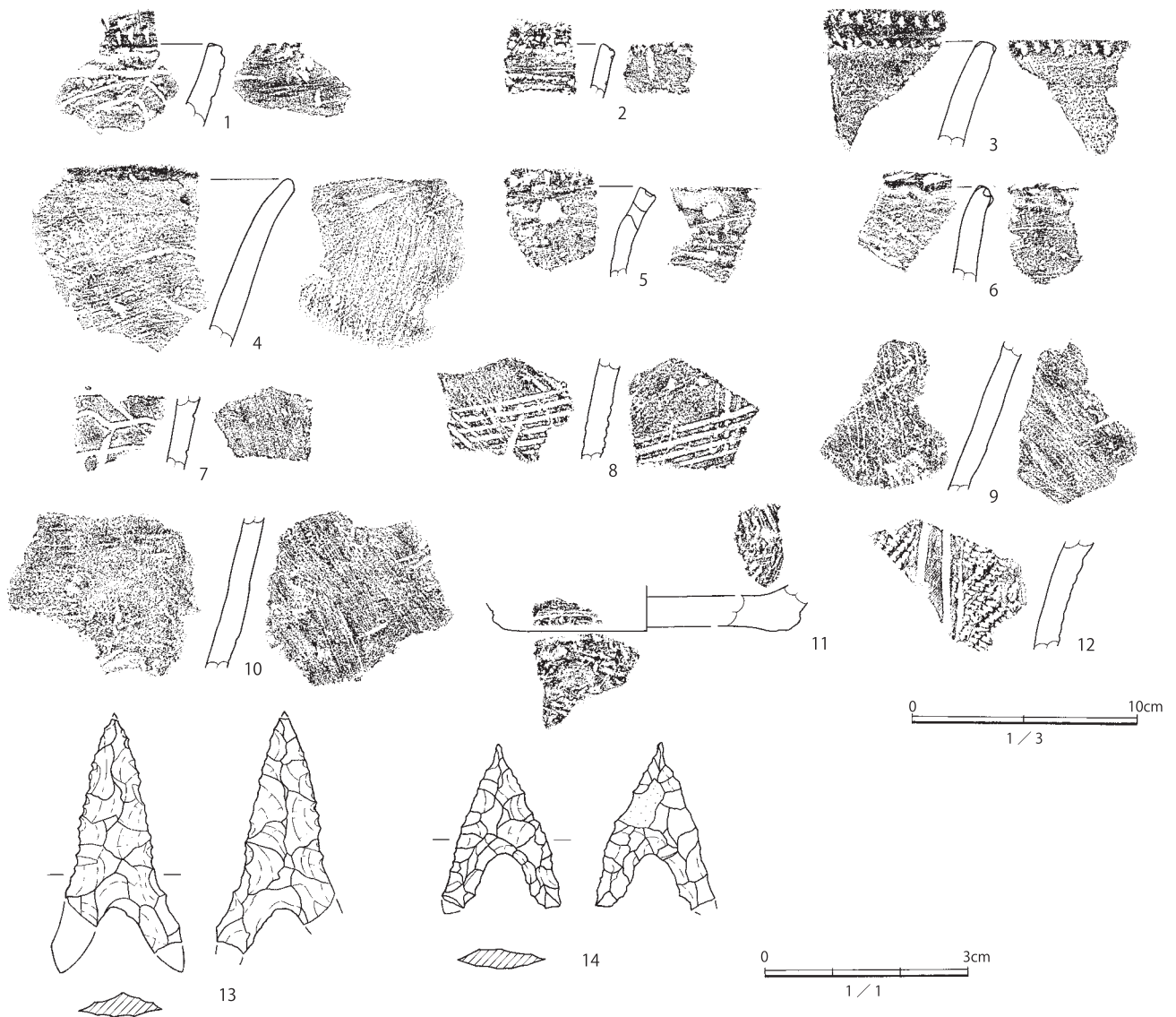


SK01 焼土と炭化物の集積

された。焼土の下に入り込むように堆積していることから、これらが一連の集積である可能性は高いが、粘土そのものは被熱しておらず、使用目的などは判然としない。推定底面南西隅付近から寛永通宝1枚（第10図61・新寛永文銭）が出土している。

SK02（第4・11図・図版5）

規模：2.90×1.32m・深さ：46.0～50cm・軸N-31°-W バスタブ状を呈し、塚の南西辺中央の裾部分に位置する。土坑の北端がセクションベルトにかかるが、土層断面から塚との新旧関係は判断できない。覆土はほぼ単一の黒色土層である。底面から側面にかけて、多量の炭化物と少量の焼土粒が混ざるが、その場で激しく燃焼した痕跡はみられない。その位置や覆土から、塚との関連性は強く考えられるものの、土坑の使用が塚の築造前か後かで、遺構の性格も変わるものと思われる。覆土から寛永通宝が1点出土している。



第12図 出土遺物(4)

(3) その他の時期の出土遺物 (第12図・図版7)

塚封土内から出土した縄文土器及び石器・礫は、縄文時代早期後半田戸上層式期の土器が204点・1,963.2g、中期加曾利E式期 8点・143.1g、礫（被熱礫・礫石器含む）281点・26,429.1g、黒曜石剥片115点・153.7g、その他石材剥片5点10.2gである。試掘による確認には至らなかったが、付近には当該期の遺跡の存在が予想される。

第11図1～11は擦痕調整を主体とした田戸上層式期の特徴を有する土器である。いずれも胎土に繊維を若干含む。8の胴部片と11の平底片は内外面に貝殻条痕調整がみられる。12は加曾利E式期の胴部片である。13は黒曜石の長脚の石鏃（重量1.34g）、14は凝灰質の石鏃（0.71g）である。

塚から北東4.5kmの新井花和田遺跡（現新井浄水場）は、やはり出羽三山信仰の供養塚（花和田三山塚・後述）の封土中に、縄文時代早期後半田戸上層式期から野島式期にかけての土器が多量に含まれており、その下層に当該期の集落跡が広がる状況がみられた。

第4章 総括

今回の調査によって、供養塚の築造に関する新たな情報が得られた。土層観察用のベルトを残した3層目のちょうど中央交差部分に、全体量の約84%（800点）の出土銭が含まれており、最下層には鏡や数珠などを埋納する地鎮祭祀跡も検出するなど、想定以上に3層基底層部分の中央部に集中していた。これは、鏡を埋納する地鎮祭祀を行った後も、その中央部分を意識し続けた結果の構造であろう。

出羽三山信仰と鏡といえば、羽黒山山頂の御手洗池（鏡ヶ池）から出土したいわゆる「羽黒鏡」を想起させる。ただ、池に奉賽された610面以上ともいわれる大量の羽黒鏡のなかで、江戸時代の鏡はわずか3点のみであり、大半が12～13世紀の鏡であることから、直接の意味合い的な結びつきは薄い。塚の中央部最下層に埋納されたという意味は、やはり鏡の呪力によって地の神を鎮めることが第一義であろう。そして、その鏡は地鎮や除魔だけでなく、羽黒の鏡ヶ池のように、出羽三山の御霊代としての役割も意識され、奉賽されたものともみることができよう。

銭の出土状況は、その使用単位が明白にまとまってみられたために、地鎮祭祀と銭を撒く行為の段階を追って、一連の祭祀行為の様子を垣間見ることができた。また、寛永通宝で新古が判別できるものは計629枚、うち古寛永が228枚、新寛永が401枚であったが、新寛永は全てが背面上部に「文」の字が鑄出されているいわゆる「文銭」であった。背面が無地の新寛永や波文様の四文銭も認められない。新寛永の文銭は寛文8年（1668）から天和3年（1683）の16年間に亀戸鑄造所のみで量産されたものである。その後元禄10年（1697）から背面無地の寛永通宝がつくられはじめる。このことは、塚の築造年代を具体的に想定する鍵となる。すなわち、古寛永と文銭のみが十分に流通していたと考えられる延宝（1673～）から元禄（1688～）期の背面無地の新寛永が流通するまでに、この塚の築造時期を絞り込むことができる。それは第1章第2節に述べたように、市原市域に出羽三山信仰が浸透し始めた時期と合致するものであり、興味深い結果となった。

これまでの調査によっても、供養塚はそれぞれの地域の方法で築造されており、一様ではないことがわかっている。したがって、平野馬頭塚を理解する上で、他の塚を簡単に紹介し、構造や出土遺物などを比べておきたい。

第1図に市内で既調査（記録保存：消滅）の主な塚を記したものである。地域的に平野馬頭塚に近い南部の塚は、傾向としてやや近似するが、北部の塚とはかなり異なっていることがわかる。

小草畑三山塚は、標高200mの丘陵上にあり、尾根を切ってベースとし3段構造をなすため、盛土の量は少ないが、21.5m四方で高さ5mを超える規模をもつ。封土中からは寛永通宝等700点余りと、カワラケ数点がみられ、そのうちの銭200点は中央部に集中していた。この塚は安政2年（1855）に行われた盛大な梵天供養行事の記録が残る塚でもあり、消滅は惜しまれる。封土に大量の銭を含む様相は平野馬頭塚に近い。しかし、カワラケの使用は平野では一切確認できないものであった。

新井の花和田三山塚は標高133mの丘陵上に位置し、1辺が23m、高さ5mと規模が大きい。地山を整形して土壇を作り出し、周囲に設計図的な溝が複数条巡る。土壇の四隅と中央にカワラケが配され、中央には寛永通宝3点も伴う。塚の封土内にはやはり寛永通宝主体で100点ほどが含まれており、中層では土坑に埋納された状況も確認された。遺物の出土は3層目に集中しており、その傾向は平野馬頭塚に近い。ここでもやはりカワラケが用いられている点は異なる。設計ライン的な溝は平野では一切

みられなかった。これがない状態で成形し、なおかつ中心を意識することは困難なことが予想されるため、棒と紐などで簡易的に記されていたものと想定される。

一本松塚は新生荻原野遺跡に含まれ、調査がなされた。24.0×23.5m、高さ3.6mの3段築成であり、中央最下層には、常滑産陶器の壺1点とその直下にカワラケ50点を埋納した土坑を検出した。壺内には6枚組で紙紐や繊維束で綴られるなどした763点の銭（主に古寛永）が納められていた。さらにその土坑の底面からは、銭20点余りが出土した。古寛永のみであると、17世紀中頃まで遡る可能性があり、市原市域での出羽三山信仰初期の塚ということになる。盛られた膨大な封土内からは、カワラケ1枚と寛永通宝12点しか確認されておらず、土を積み上げていく上での作法や祭祀行為が、平野馬頭塚や上記2つの南部の塚とはかなり異なっている。

惣社行人塚は、国分寺にほど近い集落内の塚である。19.7×19.3m、高さ3.8mの三段築成をなし、近世文書には「延宝年中未ノ十月湯殿山之塚ヲ築」と記され、延宝6年（1678）に築造されたことがわかる塚である。調査記録の大半が失われており詳細は判然としないが、中央部の下層より、柄鏡を差し立てた周囲に初穀をつめて口を合わせたカワラケ5組10点を十文字に配する祭祀跡が観察されたという。封土内からの遺物の出土状況は確認できない。ここに鏡という平野馬頭塚との共通項が見いだせるものの、初穀入りのカワラケと柄鏡を用いた整然とした祭祀内容もかなり雰囲気を変えている。

出土遺物の分布とその意味合いにおいては、やはり基底部の中央部には必ず地鎮祭祀跡がみられることが共通している。加えて塚の四隅をも意識する事例が花和田三山塚でみられるが、他では見られない。築造時期は異なるものの、これらの祭祀行為は、その状況からどれも地鎮祭祀とみることが可能であろう。その方法は地元の講の指導者である里先達や末派修験者などの自己流的な影響力によるものと考えられる。彼らが従来からの鎮壇具としての鏡やカワラケや銭を使い、それぞれの方法で塚を築いていくことは、ある意味出羽三山信仰の教義や規制にとらわれない、遠方ならではの手法であったのかもしれない。また、供養塚の分布がほぼ千葉県内のみで収まることについて、その理由や源流をたどることは難解であり今後の課題でもあるが、3段築成の塚を出羽三山にみたと、これを拝するという、これまた遠方ならではの理由が少なからずあったのかもしれない。

市内における近世期の発掘調査は稀にしか行われていない。そのなかで、今回のような供養塚の調査も、上記のように数件が管見に触れるのみである。報告に至っては、「花和田三山塚」の13ページ分（本文・図版）が最大であった。しかしながら、近世の情報は確実に風化している。近隣住民に尋ねても、平野馬頭塚の存在を認識している人はほんの一握りである。ましてや刻々と変貌するその信仰の実情の復元となると、さらに難しいであろう。今回の調査のような、供養塚1基の築造工程に関する詳細な考古学的成果を見いだせた意義は大きい。

参考文献

- 前田洋子 1984「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌第70巻第1号』日本考古学会
- 高橋康男 1988「9.小草畑平遺跡」『市原市文化財センター年報昭和61年度』財団法人市原市文化財センター
- 田中清美 1998『市原市新生荻原野遺跡』財団法人市原市文化財センター
- 時枝 務 1998「出羽三山」『季刊考古学63 山の考古学』雄山閣
- 永井久美男編1998『近世の出土銭Ⅱ』兵庫県埋蔵銭調査会
- 高橋康男 2001「第6章花和田三山塚」『市原市新井花和田遺跡』財団法人市原市文化財センター
- 原田昌幸 2005『日本の美術466 山岳信仰の美術 出羽三山』至文堂
- 北見一弘 2011『市原市荒久遺跡B・C地点』市原市教育委員会

写真図版

里見駅

平野

養老川

万田野川

大戸

○
平野馬頭塚



調査前 北西から



塚頂部 伐木前 北東から



塚表面清掃風景 北西から



調査前 東から



調査前 南から



1層断面及び2層上面遺物出土状況 東から



1・2層断面及びB区3層上面 南から



SK01 焼土と炭化物の集積 南東から



3層上面 撒き銭7b 出土状況 北東から



3層上面 撒き銭6c(中央奥)・6d(右前) 出土状況 南から



撒き銭6c 出土状況 南西から



1・2層土層断面 北西から



1層～3層上半部分土層断面 北から



1層～3層上半部分土層断面 北西から



3層土層断面 北から



3層土層断面 北から



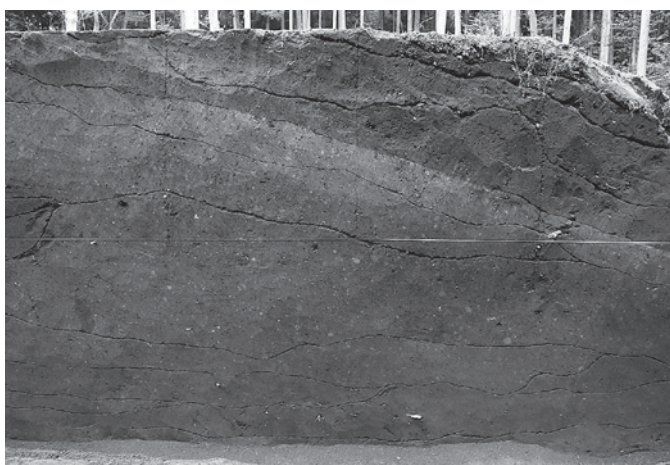
3層土層断面近景 北西から



3層土層断面 西北西から



3層土層断面 西から



3層土層断面近景 北西から



3層土層断面 南西から



3層土層断面 南西から



3層中央部分 撒き銭6a 出土状況 南西から



撒き銭5b・5c 出土状況 南西から



撒き銭5b 銭差状出土状況 東から



撒き銭4a 出土状況 北から



地鎮祭祀3b・3c 銭出土状況 南西から



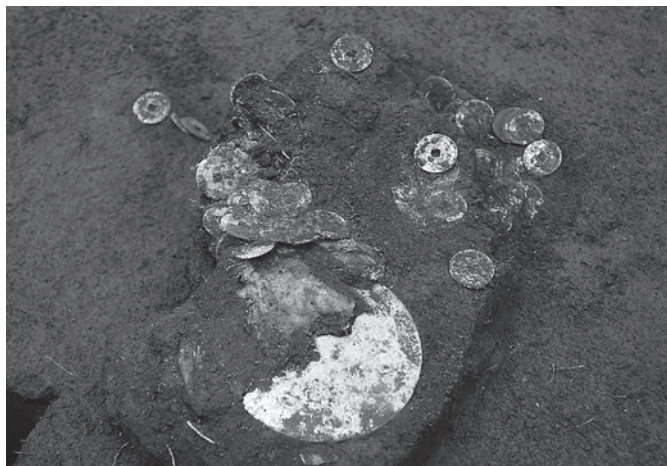
地鎮祭祀3b・3c 銭出土状況 西から



地鎮祭祀2 漆塗鏡箱蓋外面出土状況 北から



地鎮祭祀2 銭・数珠玉出土状況 北西から



地鎮祭祀2 鏡出土状況(鏡面が上向き) 東から



鏡取り上げ後 木質鏡箱底側内面 出土状況 東から



地鎮祭祀1b 銭出土状況 北西から



塚中央部最下層 地鎮祭祀1a 孔内銭出土状況 西から



SK02 底面の黒色部分は炭化物 南から



旧表土面(手前はSK02) 南西から



旧表土面露出状況 北西から



出土銭（出土総数952枚のうちの一部）



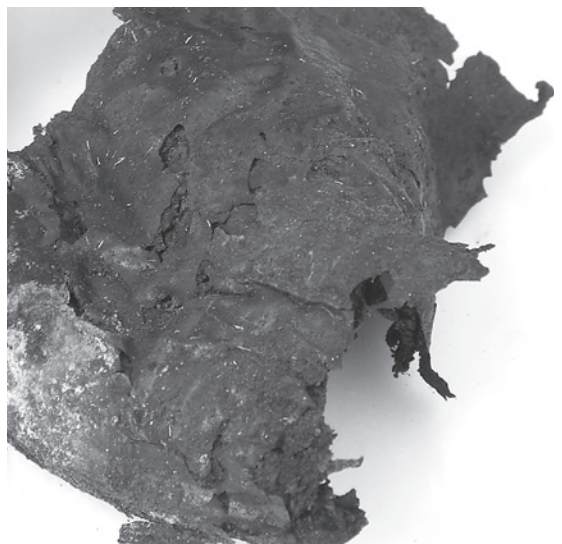
錆で固着した銭 3層5a~5cに多くみられた



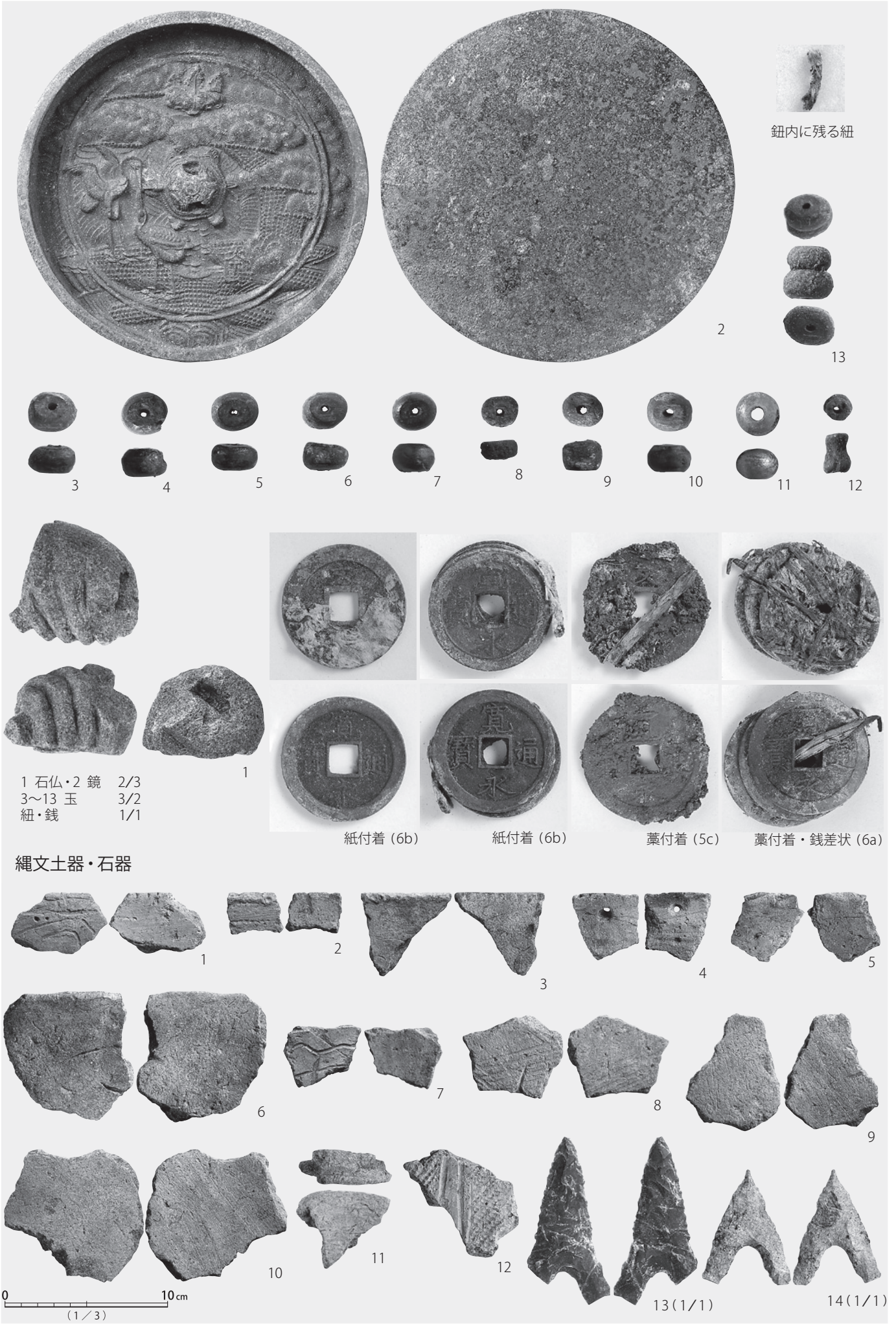
漆塗鏡箱 底側内面



数珠玉 ガラス製(中央)・真珠か(右)・木製(周囲)



漆塗鏡箱蓋外面 黒漆塗地に赤漆で線描



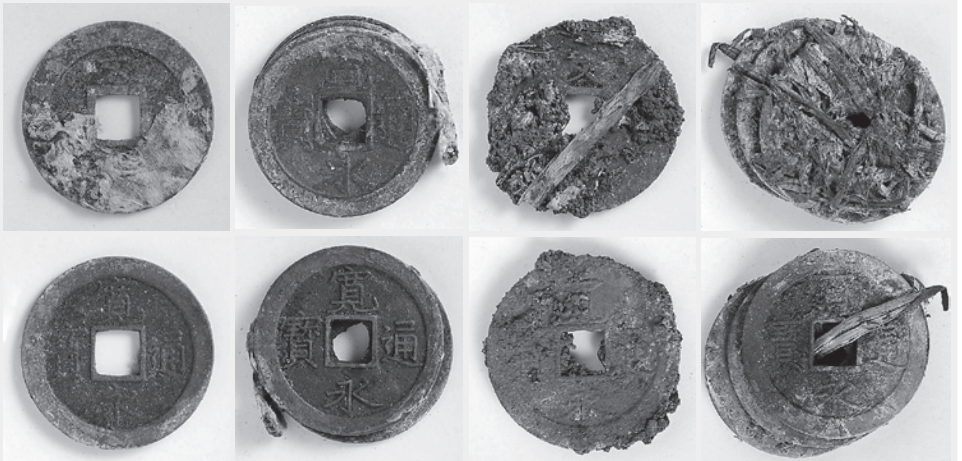
鈕内に残る紐
鈕内に残る紐

2
13

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

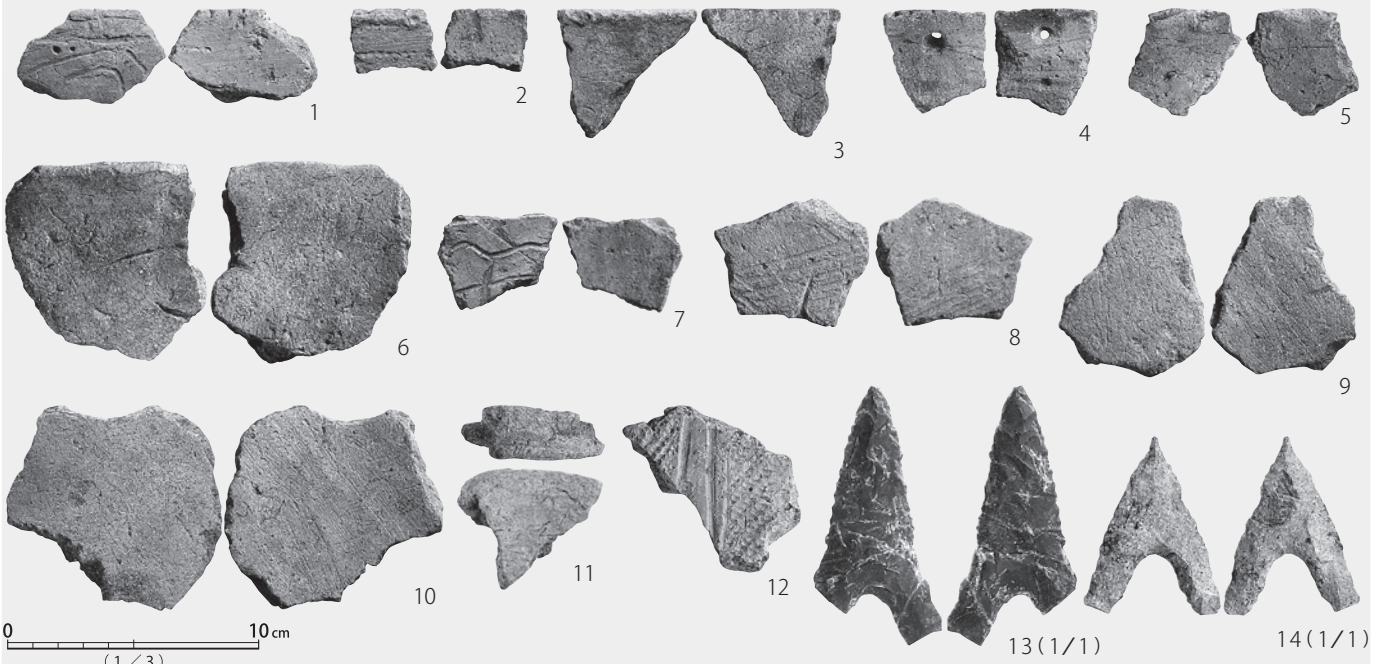


1 石仏・2 鏡 2/3
3~13 玉 3/2
紐・銭 1/1



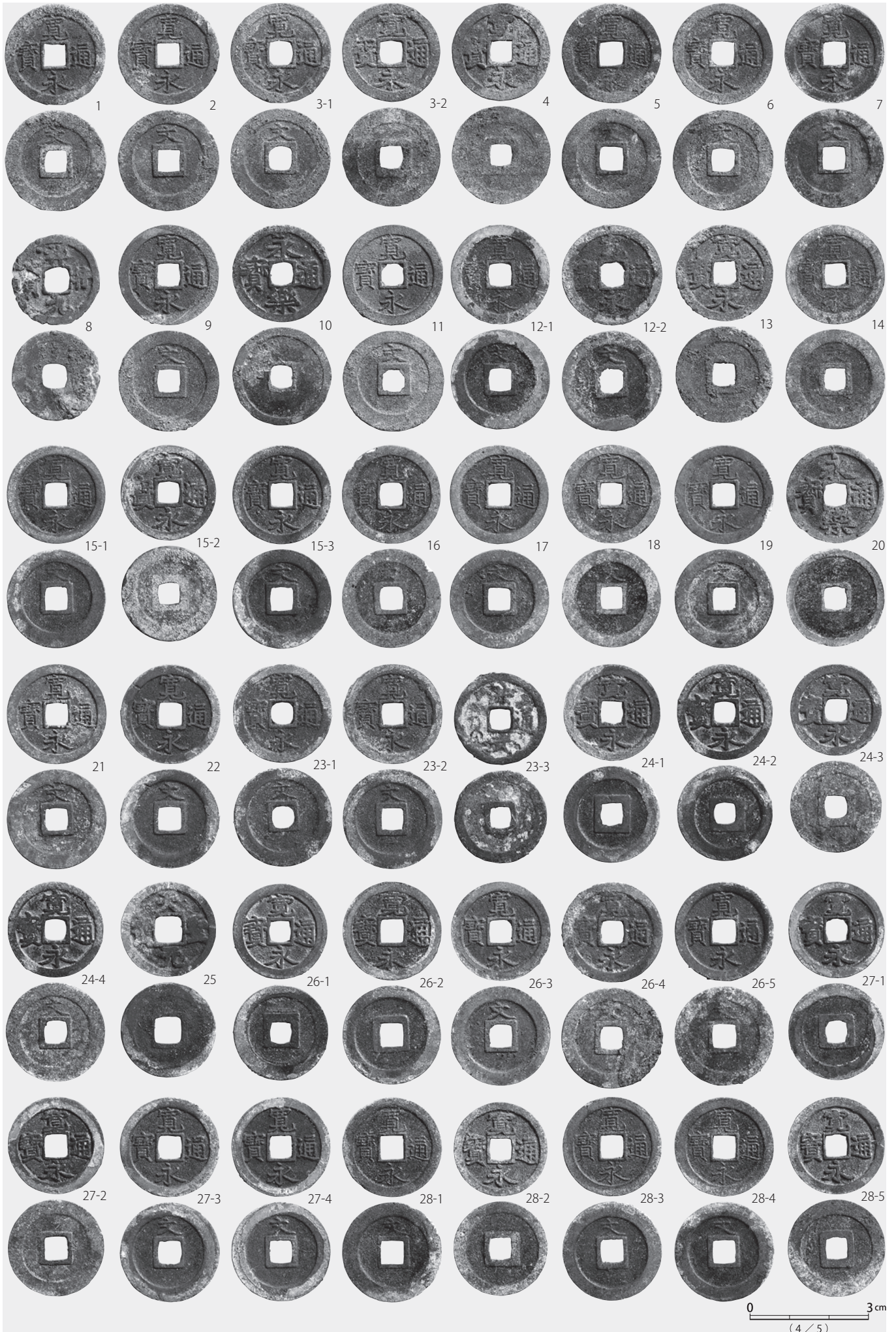
紙付着 (6b) 紙付着 (6b) 藁付着 (5c) 藁付着・銭差状 (6a)

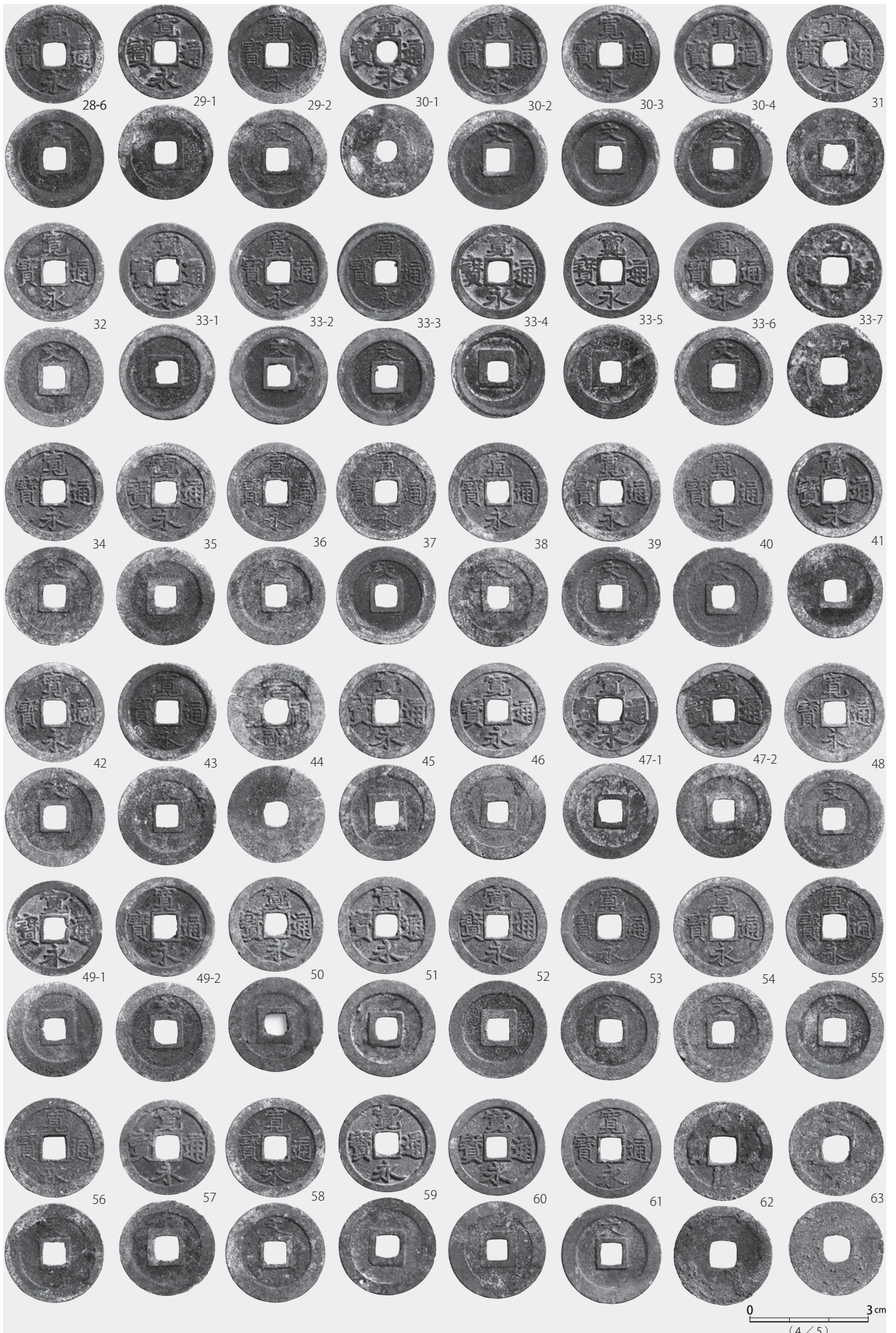
縄文土器・石器



0 10cm
(1/3)

13(1/1) 14(1/1)







真高寺山門前の石塔・石仏



石塔



石塔右の馬頭観音立像(寛保年間)

真高寺山門前 石塔碑文

安永七年 (1778) 銘

(正面)

月山 御峰十万八千佛日本村々地頭武運長久
湯殿山 四天王日本大明神天下泰平國土安全
羽黒 御澤八万八千佛郷内安全五穀成就萬民

(右側面)

西國三十三ヶ所 秩父三十四ヶ所
熊野三社大権現
坂東三十三ヶ所 四国八十八ヶ所

(左側面)

水神権現
御山諸神諸佛
南無釋迦如来浄大師
日本三虚空蔵
鹿野山明王

(背面)

願主 田邊久左衛門
安永七戌戌稔 十月吉日 大戸村
奉納 十ヶ村行人塚
中 講



塚から南西150mの道端に座す馬頭観音像



左側面



右側面

塚付近の馬頭観音坐像

元治二年 (1865) 銘

(右側面)

元治二年二月吉日

(左側面)

平野村
佐久間治左衛門儀廣



大戸へ下りる道の辻にある馬頭観音像



報告書抄録

ふりがな	いちほらしひらのぼとうづか							
書名	市原市平野馬頭塚							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	牧野光隆							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2011年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひらのぼとうづか 平野馬頭塚	いちほらしひらのあぎたかの 市原市平野字高野 だい432-1・3	12219	セ463	35° 19' 45"	140° 08' 12"	20100802～ 20101005	529㎡ 本調査	土砂採取
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平野馬頭塚	塚	江戸時代	供養塚1基、土坑1基	江戸時代銭貨・銅鏡・ 数珠玉、縄文時代早期 土器・石器		江戸時代前半期の出羽三 山信仰に関わる供養塚を 全掘し、築造過程の祭祀 行為などが明らかとなっ た。		
要約	塚は、養老川上流域左岸の標高155m前後の丘陵上に位置する。今もなお市内各地で篤く信仰される出羽三山信仰に基づいて築造された供養塚を本調査した。塚を築造する際の地鎮祭祀をはじめ、土を盛りながらの撒き銭など祭祀行為の一端が復元でき、信仰の様子を観察することができた。出土した寛永通宝が古寛永及び新寛永の文銭のみで構成されることから、塚は概ね延宝から元禄期前半（1673～1697）に築造されたものと推定される。その後、幕末には馬頭観音を祀る「馬頭塚」として新たな役割を担っていたであろう。							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集

市原市平野馬頭塚

平成23年3月24日発行

編集 市原市埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489

発行 有限会社 丸和建材社
千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1